古史本辭經

四

ホ 2
105
4上

2 利水門
105
4
巻

古史本辭經 亦云五十音義訣 卷出四

大壑 平篤胤撰述 男 鐵胤
孫 延胤 謹校

○古語延約通畧等說第九

今しは誰も知ぬて云ふる延言。約言。畧言。轉回れる言ふどの事ゑ本考ふ。上件の說等ゑ次り。其大概を誨さきさ法ゞ。此條〻ふは。論ひ直ゑ乃ゑ事等ゑ。然るふ今印本。おれらゑ條〻甚く錯亂して。其儘ふは取ゞのさし。故今は既よ云へる。已ゞ闇記の臆斷をもて。其文を訂正ゑ。按ふ旨ゑも述む。次。其は本考ふ。延言約言と標して。後世ふ漢圖ふ反と

云ふに依りて。反しと云ふぞ。我国りた。二言を約めて一言と
し。一言を延て二言ふ云ふと有れば。反しとれみ云ふた足
げ為れ。篤胤云。契冲の正濫抄ふど。反しを切とも云へ。
説のごとし。但し此もろれ古
説に。固をゆ有し名称ふるう。且まだ阿を延る我始とに
ば。延言我先ふ舉ると云ふぞも。是ふた童部の心得易うら
むゞ為に。約言を先いへ。其約むる事ハ。○淡海国たもを
阿波宇美をふ名ふ依我。其波宇を約むれば。布とふる故り。
假字は阿布美と書れ。是をあうミの如く唱ふ。言便
も。あうみとも書べきを。必ふ。其唱れまゝふせば。おうみと
阿波宇美てふ言ふるを知る。ふり。○篤胤云。阿波と阿布と
た同言に。淡海をあふみと云。た。阿布宇美の宇れ省れ
る言ふり。其た布ふ宇。韻あまバふ。委くた阿行篇の第五

章にいへり。宇斯の説れ如くふても。言の本た同じゝれど。
阿波。阿布。同言ふる古義を思ふ。此方やはさゆぬべき。
○遠江国た毛を。登保都阿波宇美と云るを。其都阿を約れ
ば多と為ふ故り。假字は登保多布美を書ふ。是も唱ふ
とうみとも。をふとほみとも書べきを。右の約言れ例ふよ
ふら。必を登保多布美を書ざれば。おとゆを成さ。○篤
胤云。これも阿布美た。○行知布。戀知布れど万葉ふあるは。
上ふ準へて知ばし。
行といふ。戀といふと云言れる我。登以を約きば知とふふ
故ふ。ふり有ふふ。今京こふとは。其知を氐ふ轉して氐布
といふ。今も東国ふてた。ちふと云へり。
○和布を爾伎多倍を云を。それ多倍を約めて爾伎氐とも
云へ。尓伎た。調ひてう約くふきを云ふ。○我妹子我和藝
多倍は。布の類を安ばいふ名ふ。
毛古と云た。和賀伊毛古れ。賀伊の約免藝ふれ。是ら

れ類百千あまぞ。皆是ふれら子。本言の濁るも。延約ともは濁きり。それ清濁違ひても叶も爰。○篤胤云。和賀和藝ハ同言ふて。我妹子を和藝毛古と云は藝ふ伊韻あるゲ故ふ。妹の伊れ省かりしふり。和賀和藝ともり。吾の古言ふはこと。和行れ第一章を見て知るべし。○堅れ音ゑ直ふ約め云ふは。紀ふ伊比爾惠氐と有はも。伊比爾宇惠氐ふ。草木ゑ植る。惠とれみ有るも。共ふ宇惠を約とる。れゆ。伊夜を夜布保を保ぞいふ類ふゆ。○竝の横韻を直ふ約め云ふは。万葉ふ。於毛比を毛比。於登ゑぞ。れど云類ふゆ。是等も畧くふ非爰約ゆ。れ。篤胤云。印本此間ゆ。○或も約ゆ云く。○夜も須我良尓云く。○志加志奈我良云くてふ三節あるは。轉回通と云る條の錯乱ふ。正べし。○右れ如く二言を約るは常ふて。三言四言ゑも。一言ふ約るも有。神代紀ふ。都利婆里れ事を

知とれみ云も。其上下れ都と里ぞ二を約め云ふ。篤胤云。釣を知ぞ云も。多く都理の約。ふゆ。波理てふ言よは係ら爰。多行れ第九章を見て知べし。○比乃志多てふ事ゑ比那と云は。比も日れ。乃志多れ上下の乃多ゑ約れば。奈ぞ成れど。篤胤云。比那も比泥と同言ふて。古の義ふ。委くは波行の第四章を見て知る。ちて印本此下ふ。○言の下ふ。須良ぞいふ辞も云く。と云る章あるは。轉回れ條の錯乱ふ。○延言右れ約言は。其言長くふて。云ふく。け難き時ふ約めいひ。此延言も言短くふて。其言ふいでれ惡ふ時ゆ延ていふ。篤胤云。下ふ。ふあるを。由都以波牟良云く。○宇良夫礼も云く。○御印本此。ことれりぶをふ云く。○見万志。由加万志ふどは云く。と云。ふ章くゐれど。其も轉回の條れ錯乱ふまば。此ゆ出さ爰。○見ふ少れきれるを延て。見良久少れぞ云ひ。戀る多れるを延てふ良久の多きと

二云ふ。是れ良久の約めるなり。逢はむとし紀のむを延て。阿波ふると表裏あり。万久の約。此外ふ花ちはを花ちらふ移万久ホし紀を云ふ。武ホ武ホ。此外ふ花ちはを花ちらふ移る残うおらふれど云類これ延言ホ。是まと限り無ろれど。皆是らの意れみ。

○二度延さる石。万葉一ふ。家告閉とあはた。家を乃禮の禮を延て。良閉を詔ひしふて右の類れ。良閉の約。即礼あり。名告佐根と有はた。はお名告れと云ふ禮を延て良世と れるを。其世をまと延て。佐根をよみ坐せ。是残約言もて約むは時は。奈乃良佐禰の。佐根れ約。た世ホ。其世ホ上れ良を合せて。良世を約れて禮と成て。名告禮てふ言れり。ホ残以ホ延言約言れ有こを知ばし。さて同集ふ。草を加良佐祢といふも右ふ同じ。此類多

のれど。皆かくホ。○篤胤云。右二節印本ふ。暑言れ條ふ錯出せ。○暑言おれふ種くあ。高脚ふ多可之と云は。加を引くふあれこもれでふり。過去し残過ふし。小青を佐乎。腹赤を波良加ホども右ふ同じ。○家を倍上を倍道ふ知石を志といふ類た。只ふ暑ハはホ。○宇くく良く残宇良く。久く残比佐く。浅くを阿佐くれど様ふ暑くも有。○下を暑くた。天ふあ足残あ。時を登をいふ類ふり。○上下残暑くふも種くあり。佐我美の国た。牟佐我美れ牟を略き。牟佐斯れ国た。牟佐斯毛れ毛を暑きと。西北の国た。前後をもて名ふ分ち。東国た上下残もて。然て身狭といふ地名た。諸国ふ多し。おくも其身狭れ名をり。国の名をた成しホ。○篤胤云。相摸。武蔵二国の内ふ。身狭て地名あるホと無きで。此た従ひグとし。内山眞龍グ言ふ。相

撰武藏の名は足柄坂より基おきて坂上ある国を佐賀美と
いひ坂下ある国を羊佐志といふ御坂下御坂上の義を云、
説ぞ近うりは。○乎〻里を云は其も也。木は枝草外どは多和
く靡く去と栲畧紀云ふ也。まだ多和美靡くを云ふを其多
和を重祢美を畧きて多和くを和くをいふを多栲登より通はせ。
和と乎栲隅違ひふ通はせて登く乎くをいひ其登く乎く
栲畧きて登乎〻を云を。はさ畧きて乎〻里と云也。此里は
美ふ通ひて多乎美といふより同じ。即多和美ふゆ。かく幾度
も略〻ふ多し。篤胤云宇〻良〻云〻より以下四節は印本ふ錯出せり。ふ本正月を羊都伎
と云を始め十二箇月は名の解も有れど印本いさく乱れ
て其月名も多く落とるふ今しかの眞跡本は文字をくも
闇記せば〻ふ此は万葉考はも出さまず漏せり。けて此乎
乎里の説まと従ひグとし其は乎〻里は和行の第八章より

出る言ふて袁宇袁恵とも活きて勢ひ弱れる意の言多和
は多行の第八章ふ出て多和み多袁やうふど活く言ふて
相似とる言ふがら元より別ふ也。委くは其章〻を見て知べし。○轉回通は也例は神代紀
万葉らふ五百箇磐石と書ふ也いはむらをふ言より
ふるを由都以波羊良を唱ふるは伊保の約りは與外る栲。
同音は由ふ轉し云ふり湯津爪櫛湯津桂ふどは也皆是
外也。○宇良夫禮は和備ふ同じ其宇良は約りは和ふ也。夫
禮の約也は倍ふる栲備ふ轉ふを和備といふ也。篤胤云宇良夫礼は
心と振を二言合とる言ふて和備を同意の言ふは有まど
宇良夫礼を約て和備と云ふと云むは違へり。そは宇良は
和行は第九章和備は和行の第
五章ふ出るを合せ見て知べし。○御こをぬみふ命乃良万
止と有ふは。みこを乃良武てふ言ふ栲其武を万より轉し

多法ふ已。篤胤云、御こと奴こと。続紀の宣命ふどれ事ふる法々れぞ。其ふた御命良麻止詔旨良麻止れど
こそ有き。乃良麻とはふし。此はもと良米。良牟れぞ云、詞の本語ふり。委くた良行の第六章を見て知ぢし。○見
万志。由加麻志ふぎハ。見武行武と云ふ事れるを。是も万を
武を轉じ通はして云ひ。下の志は志伎の略ふて。ちなは繁
てふ言を下ふ添て。其言を強のらちむるふ已。古事記ふ。穢
繁国とある是ふ已。且ちく〜は嬉し圮をうれし。悲し圮をか
ふしを略ふ云ふ同じ。篤胤云、此轉回の條た印本殊ふ誤り多くして。由都以波牟良と云と已。あ
ふ至るまでを。延言の條ふ錯出せ已。○或た約ゑ。或た轉
此た殊りふしりふ闇記せ法所ふり。
し多法も有已。万葉ふ。比流波志美良爾と云ふ。畫たそれ万
万爾ちふ言れる歟。曾乃を約れぞ曾を れ法ふ。其曾を志り

轉し通はし。万〜れ約た万ふ法を。美ふ轉し通はし。良も万
も通ふバ。右の万〜れ言ふこゑと已。爾た辭ふて本れ如し。
篤胤云、此説用ひ難し。然るは志美良は。一巻ふ。山平茂。九巻ふ茂立。十一巻ふ。垣も繁森ふどあるふ同く。志美。志牟。志米。志麻牟と活く言りて。繁き由れるぞ。下の良た多ぶふ繁れる助辭ふり。委くた佐行篇の第六章ふ云へ已。○夜
は須我良爾と云は。夜を佐奈我良爾ふ已。此佐た志加の約。
れ法を。須ふ轉し通たし。奈は須奈れ約ゑ佐と れる故ふ。其
佐ふ須たふめさるこを。上の良をふゑしふ同じ。良爾た本
れ如し。然れば是も曾乃万〜てふ言ふ法ふ。言便ふふゆて。
志美良とも須我良とも云る れ已。篤胤云、此説も用ひがし。其た須我良の良も。志美良れ良を同く添れる辭ふり。須我は須藝。須具。須碁志。須碁佐牟ふど活きて。過字の義れ已。然れぞ須我良た過らと

云ゲ如し。是をもて終夜の字を訓來れり。委くは佐行篇の第一章を見て知るべし。○志加志奈我良てふ言を。一度約ぐ。次て志加須我といひ。二度約ぐて佐須我と云ひ。其一度約ひは志加は本は如くふて。此の如くふと云意ふめ。次の志奈を約きば。佐を外る歟須ふ轉せひ。我は我良は約ひ我れり。仍て志加須我といふ。二度約るは。志加を約きば佐とふる。須我は奈加良ふることを右ゥ同じ。約め通は安る本を心得ぬ人。さにがてふ言ふ。流石の字を何て〳〵。意得むとにるは迂遠ふひ。先ち安ゲは。ちゥしふゲらてふ意ふりを知らば。何の為と子をゥ用ひむ。其言は。物をかくせむと思へども。ちゥしふゲら。然は外れし難し。れど思ふ時ゥいひて。人皆心得めり。是を流石と書くは。流ふ石何ひて。一方ふ行ゲと知ふ譬へしものふて。是もとさにゲは志加志奈我良てふ言の畧ふるを知らぬ。俗意をゥ起き。此言を解く道を知らず。何は から字をゥ用ひむ。何の譬

をゥ借るべし。○篤胤云。志加志奈我良は。乍然ふて。下の志は。里と云も同く意ふし。志加須我は然にゲふて。其にゲは人も知ふゥふど云ふゥふ。て。添詞ふり。志加志奈我良とは元ふひ別れり。然れむ此説も從ひ難し。然れと佐須我は。志加須我の約ひてふ説は違は。委くハ佐行篇は。第一章を見て知るべし。○言は下ふ須良といふ辭は。曾乃万くにいふ事外ふを曾乃万く一言の上下を約きば左を外ふ歟。須ふ轉し通はせて須といひ。次は万は良ふ通ひて須良とふれひ。上は夜は須我良ふ合せ見を。篤胤云。此説も從ひ難し。須良は尚ふて。其ゲ上ふゆこれと云意ふて曾乃万くと云ふゆは。言のもと甚く違へゲふひ。委くは佐行篇の第九章を見て知べし。かく其言は本歟尋ゆて。後よゆ思ひ當る時は。むゲゥしけきど。都て打いづるゲ。自ゲゥら此五十聯の音ふの外ふふゆ有ふ。既ふも云ふ如く。天地のいは

ゑむる言は国の妙なる也とのゐ。此訂正のさまは印本と合せ見て知るべし。上件は考説圏點をもて別ち著さゝ章く。ゆゑを二十六事なほ中ふ。十事ばゝゐは動なふき説なるゞ。其餘は我の下ふ次く論ふ如く。今しも從ひ難く思ゆほ説等なるふ就て。亦茲ゝ取都て論ふべき事らのゐ。其は宇斯は文ふ。約言は事ふ。波宇斯約きば布とれる云く。延言の事ふほを延て良久といふ云く。略言は事ふ。牟佐斯毛は毛を略き云く。轉回通のゑとふ。万と武斯轉し通はし云くれど書れ。まゝ或は約言はそれ言長くゑて云ゑゝけ難ま時ふ約めいひ。延言は言短くゑて其言ゑいゑれ惡き時は。延て云ふども云れ

ゑほは。人は心と殊更ふ。延約略き轉し回らし。思ふ任ふせし如く聞えて何ふゐ。本考の言ゑうひ。凡て如此きのみふ非ゑ。宇斯は著書ミれ同じ趣ふるを學びて。世の學者さちは常云ふ所も是ふ同じ。然れど此は。宇斯のゆくゐ無く。其いひ樣を誤られしれゐ。其は初ゑふ舉さほ文ふ。此言語ふゑも。天地の父母は教ふゆと云ひ。今も天地は云ゑむる言は国は妙ふるれゐと云れさほは。謂ゆる言霊の幸は自然ふゐ。と云意ゑほふを以て知べし。抑言語は上ゆ。延さほ言のゆ。約ゐさほ言のゆ。略ゐさゑ言のゐ。轉り回ゐ通へる言あゐ。其延るも約るも。略ゝほも轉通ふも。人は支覺ふをほ事ふは非ゑ。實め天地の父母は云ゑむる。惟神の道ふゐ。そは此東

囲あとゐふ。何といふことぞと云こゝを。ふむちふ事ぞと云ひ。錢の一貫を。いつゝんゝと云ひ。佛の觀音を。うんのんゝと云ぬぐひ。其いふ徒がら。誰も。どいふれといを約て。ちふと云べき事も。くゐんのくゐを約てのんゝと云べき事をも知りて。ちゝと云ふゐれ非ゑ。これ自然ふして。然云ふりても知べきあゐ。然れど此等れ名目め。れゐ言。ゐぐ免言れど云ては違へゐ。延言はのびこと。約言はゐまゐゑ。略言はたぬのゐゑゑ。轉通言たゝうゐゐ通ふ言れど云はでた。道理のれを。其たの言ゐぐ免言あど云とゐた。人れオ覺をもて。延ゐ約めとる事とあまばあり。此はあぐ名目のミオ抑こ非ゑ。文ゑ其事を云ふりも。意ちらび有べき事あゐ。れ語意考のぬみふ。然る誤言も交れる由た。此宇斯。古學創草の第二世り出て。其頃いまゞ古語れ延約と云ふ事をゞふ露もえ知らぬ世人らを宇豆れひ思ふ懇切のゐはゐ。彼荷田大人ふゐ承られとゐ古說ふ。ひゑゐ寶とせゑ。疾く容易く佗ふも示し傳へむと。此書を草稿せられ。未精撰あゆ竟ゑ。世ふ傳ハゐし故ふ。然る誤言れ交まゐあゐ。此た既く村田春海ゞ五十音辨誤ふ。師の記されとゐ語意といへる書は。その身はゝられふむ際ふ。且くちゐし置れゐるふて。猶考へ改められゐゑれを。然る事もあき侭あまバ。思ひ誤られとゐ事も多ゝゐ。と云るゞ如し。宇斯の在ゝゐし當時。ふふ古言れ處分れ知ざゐし事。はと翁れ其を嘆ゑ思はきとゐ趣も。上の万葉一ふゐ。家告閉云〻の詞ふ釋てふを以て延言約言れ有こゑを知ゐ。しゑ書れし一語をもて也知るぢきれゐ。

○古言學由來第十

言靈は神の幸はふおれの皇國は古の言語は道を學ばむと
ほるふは舊き辭書ふ據らずは有べからず古は辭書等は
いと多かりと聞ゆるが中ふかれ勅語の舊辭といふ物ぞ。
最も尊く正しう侍る思ひ奉らふく。然るふ今その書有
らざまは知ぬのらぢふが如くふれども元明天皇は和銅
四年ふ太安麻呂朝臣ふ勅して古事記を撰ばしめ給へる
は天武天皇は稗田阿禮ふ誦習はしめ給へりし謂ゆふ勅
語の舊辭を以て錄さし給ふ侍由ふまは。此事委くハ古史徵の開題記ふい
ふ。古事記ふ侍古語は悉く勅語の舊辭ふる事いふも更
ふ此ふ日本紀萬葉集を始め古書どもふ記し傳ハま

侍古語も皆舊は辭書ふ依りて記されと侍ふるるれば。
今し言語の道を學ばむは古典ふ據らびは有べからず。
然はのまど書籍ふは記し傳ハらずは古へよりは詞ふれみ唱來
ふめ多ふ侍べはまは古書ふ例ふしとて強ふ捨べき事ふ
も非ずかし斯て御世ふるはふく世の中は事業ふげく。
其稱呼も多く成ぬるふ就ては古へふき詞も多く出來べ
き理ふ有。然る上ふ世間儒學佛學の盛ふ有しふ頃は萬古、
ふふ侍事は思はずは言語の道も濫がはし事は有ふ侍は。
甚も慨き事ふ有ふ爾ふ村上天皇は御世頃ふ源順朝臣。
延長第四公主勤子内親王は教旨を奉て舊は辭書どもを

集め。國史万葉集ゑどゑ載せる古語をも拾ひ。猶博く諸書ゑ考へ證して。倭名類聚鈔を著さまさとゑた。最も愛と功績りて。古へを學ばむ人。誰りはゑれ書ゑ賴らざゑ。其はそれ自序ゑ見えさゑ如く。當時ゑでゑ和名を屑と爲ざゑし故ゑ。其弊を採むとゑて。輕嶋れ大御代ゑ成りむ。彼五十聯音圖を龜鑑と爲し。古假字格を正されし書ゑゑ。此抄の事む上ゑ引出て論ひ。むさ古史徵の開題記ゑ記せれむ。まり〳〵ゑ委くむ云む爰いりれまば其後の歌人等。ゑの書ゑ然しも心玄用ゑる事ゑく。いゑ。ゑ。ゑ。ゑれ差別をさ了ゑ得知爰て。彌〳〵益〳〵謬ゑ來ゑりゑゑた。彌まに〳〵慨さく憤ろし玄事ゑゆりゑ。然るゑ此和名鈔の有しゑ。二百四五十年れち。後鳥羽天皇れ御世ゑ。京極中納言定家卿。古典の規格ゑ據と無くゑて。一家の假字用格ゑ定め給へゑ。謂ゆる行阿假名文字遣と云書やゞて其を增補せる物りて。類字假名遣ぞいふ書は。其をゑと增益せし物ゑゑ。行阿假字遣を。今は定家假字遣と号けて。板本ゑあり。乃行阿の序ゑ。京極中納言家集拾遺愚草の淸書を。祖父河内前司親行り誂へ申さまりる時。親行申て云を。たゑゑへいゆひ等の文字の壱通ひさゑ。誤あゑゑ依て。其字の見ゑ玄難き事これ有ゆ。是次をもて後學れさめゑ。定ゑ置るべき由。黃門ゑ申に所ゑ。我もゑりゑ日來ゑ思をりゑ事ゑり。さらば所存の分。書出して進ゑ玄き由仰られけゑる間。大概りくれ如く注進れ所ゑ。申に所悉く。其理相叶へゑゑとて。乃合点せらき畢ぬ。然れむ文字遣ゑ定むること。親行ゞ抄。これ濫觴也とて。行阿の增加せる由を記し。殘る所の詞等ゑ。是ゑ準據ゑべし。子孫等此勘勒を守て。淺祕ゑべしと云ひ。類字假字遣ゑ。伊勢れ荒木田氏ゑる人の。寛文中

ふ著せる物にて、其自序おそれ二人九祕抄に、河内前司親行、朝臣述作有しふ、同甥の定家卿、御合躰のもれとぞ、仍かく号ぜ侍れらを、然もあきじ、世以て定家が假名遣を云ふらはせゆ、云くとて、其増益せる由を記せゆ、七巻よりて、都て七、定家假名遣の十倍も有べし、林春齋翁は漢文は跋ゆ、契冲の和字正濫抄に、全是等は書どもは、無稽ふかゆ濫ふ侍る。正し誨子と侍舉ふぞ有きる。其は自序中よ、有音相似易濫者、中葉以來學識俱降且不致意、遂則匪翅混以爲遠於等、迄于四位寄椎、逢寄藍木居寄戀縱令有斧正之手、典據不明、訛謬尚繁、余介之懷久矣、因繙曩編、足可證粗辯、樗栲以便流俗、未檢的據者、姑闕不强勒、爲五巻云々、と云侍ふて知べし。おゆ其假字の總論ふ、行阿假名遣は序を引て、其混乱多き事を論じ、今撰ぶ所は、日本紀をゆ次く、国史及び古事記、万葉集、新撰万葉集、古語拾遺、延喜式、和名抄のあぐひ、古今集等、及び諸家集までふ、假名ふ證とはゆ、見及ぶふ隨ふて、引て是を證は、云々を云へゆ、是ぞ和ゆ古學の起まる山口ふ有ゆ侍ふ。

ゆて此書は世ふ出さ侍は、元祿六年といふ年ゆ、和字用例書といふ物を著して、其總論ふ、正濫ふを云年ふ。橘成貞といふ者ゆて、同く八年る假字は總論を舉て、畢竟は假字遣の法、往昔未定ゆらぞ。国史、万葉、古事記、古語拾遺、延喜式、和名抄、古今集、其外家々は集をは、えを等亂まて、假名は證據とは定ゆ難し。右の書を證據と為る時は、假名遣の法はふきゆ、何樣ふ書ても苦からぬふ成ゆし、假名は法は、平上去入は四聲ふ從ひて定まゆぬと云へゆ。故爰ふ、契冲まと和字正濫要略を著し

て。其非を辯牙ゐゆ。そは其要畧の奥ゑ此書て密乗沙門契
はもる古書を引證して哥道れ便とゆ。然るゐ武江の住橘
成貞といへる人和字通例書八卷を著して新古れ假字を
まじ牙正濫ゑ誹謗せること多し。ちゆゑよをめて師古書ゑ
よ邑書べお旨を此書ゑ具ゑ述給ひ正濫ゑも添書し給へ
ゆき凡て古人の定め置れゆ假字を建へて漫ゆゑ俗ゑ從
ふばゆらざる事是書の中ゐ見えとるゞ如し宝永己丑正
月洛東隠士今井似閑其初發ゑ假字遣ひて俗ゐもれとゆ
と何ゆゑおて知べし
事れゞら。正ゐくて和歌をもて遊ぶ人の事ゐゆ。是ゑよゆ
て。今歌書ゑ用ふる言れ中ゐ。人れ錯牙ゆを措ゑて。或て昔
をゆ誤邑。或は今人の惑ひ易き戎擇りて。和字正濫要略と
名く。古書を引ゑて證ゑゆゑ。私ゐ邑ゑ顯せゆ。昔明魏法師
ゑ云人は假名文字遣を破邑ていゐ。れを。えゐれ類。ゑれ一

ゐ書べしゑ申されれゆゑ由。ゐる物ゐ云牙邑。篤胤云。明魏法師とて。藤
原長親卿の僧名ゐり。そは其著されとる倭片假字反切義
解の奥書ゑ。花山散人明魏字耕雲自作和哥口傳則應永年
中出家住山州花頂山焉。続作者部類曰。凡僧明魏花山院流
尹大納言師賢卿孫。権中納言家賢卿子。名長親。南朝任権大
納言新続古今集。亦新葉集載右大将長親詠歌有數首云〻
と見え。耕雲和歌口傳の奥書ゐ此一卷者南禪寺栖院耕雲
魏公上人所述而和歌之道滾切著明者也。耕雲南朝権大納
言右大将藤原長親卿。法名号明魏。又耕雲と見ゆ。まと源氏
物語の注ゐ小鑑。まと仙源抄ゐど云物あ邑。其哥集を耕雲
千首と称ふ。斯て假名文字遣ゑ破れる説れ。その仙源抄の
自跋ゐ見えとゆ。其大意れ定家卿の假字おのひを非とし
て。漢字ゆれ四邑を別ちて。同文字も。音ゑとりて心も変れし
ど。和字は一字ゑ心ゐらし。文字聚りて心を顯ゑ物ゐり。然き
む古〻と邑のさどれ。或れ別れ邑ゑ同音ゑ用と依あり。
以呂波四十七字れ内ゑ同音ゐるハいゐれを。えゐゐ邑。此
外ゑ。はひふへほを。わゐうえをと誦むれ。詞の字れ訓ゐ於
き。て遣ふ文字ゐり。總てい於きの文字ゑも。平上去の三邑
は読る邑れゐ邑。此ゐ和字ゑ。文字遣ひれ。豫て定免れ邑

難き事を知りぬ。定家の定めとる所。四声ふ叶れ爰。まと一字よ義あ〻れむ。其文字それ訓ふ叶ふと云ゞ。音よも非ゑ義ふぬ非ゑは。何まの篇よおきて定めとるふゝ覚束あし。然れども俄よ。是おひえを改むゑおふ非ゑを已て此一帖ふれ文字遣をちゞせゑ。音ふ通せむ者れ自おゝら此心を辯ず知まとあり。と有ふて知べし。新勅撰集ふ。同じ文字外ゑ歌。逢こゑゑ今れかゐ已のゑびあまや。行ゑゑ。知らでむ袖ぞもえ〻ゆえ。ゑを混ぜば。此歌同じ文字あゆ歌ふるばし。はゝと古今集ふれ。世のうゑ免見えぬ山おぺ入むふは。と云ば。同じ文字ふき歌と次。えとぺを音便お外じ。書違へゑらむ。不具外る事も出來べし。億計王。弘計王は兄弟ふてれはし坐ば。億計王む仁賢天皇と申し。弘計王れ顯宗天皇外ゆ。古事記ゆハ。意計王。袁祁王を書れゑゆ。億

意は共ゆれ。弘袁ハ共ふを外ゆ。億れ大の義。弘れ小ふるばし。計れ何の義といふ事ゑ知らゑ。もしれを混ぜば。此御中いおを御兄。いおれ御弟と別おとと能ざるゑし。黄口先立ちて飛べば。群雀ちゞ如網ふかゝ已。清盲進ゝて導〻む。衆盲ぬゆ如坎ふおお。明魏れ目ちひの道ちゆべゑるふ異ふらば。篇胤云。語意考よ。古き書ハ。大和れ京よ出來しよて。其音も從ひて。解ちらばれ有べゆらぬ事多ゆ已。譬へむ挂まくぬ畏よ。意計。弘計のみこむ。御兄弟ふて。同じ大殿ふれはし坐しふ。意と弘れこゑ埴ちくれ。いゆよ惑はしのらむ。然らむ御名よもかくれ申し奉るべきや。胡乱ふく分れし物ふ已。かゝまむ五十聯。音れ中の袁於。衣惠。以為の音もる義も明らゆふ別よしてかく有らでれ。是国れ言を成さゞるゞ故ゆ。相似とるをも並べ載せし也〻め。且右れ御名を分りふ。意れ平声ゆて於保の畧き。弘は去声ふて小れ意ふきむ。大別のみこ。小別れこちふ事外り。乃御兄を大。御弟

を小と申分け奉れ已。然るを吉野の明魏と云人、假字を破已し事なるに、古を知らぬ私ごゝをあり。唯古言に古き書の假字を慎み守り隨ひて、意をも釋くふ年ゐおば、えあらぬ味も出來べし。打患ふとに別ある物ぞ。と云れしも同意ふ已。はと近頃の人。らの事は於やく知ぬゞ。ちひて眞名に四聲ふよはゐしと云なの已。是は謂ふ紀事の已。五十音に自然の音のまゝば。神世に更ふも云ゑ。人世とあめても。面く ふ自ゐら知て古ゑ云々ゑ。其後よ文字わさ已て。和語の義よ隨ひて。伊爲等に音ゑも用ひ已け。眞名をも彼此と配當せる の已。譬へむ大の字に假字を遠くとも。遠保。遠於ゑ書べきふ。於保とに書とらバ。古よ隨ひて然こそ來れゆ。神武天皇の御哥ふ。於費異之ゑあるを。古事記ふに於斐之と有り。日本紀に自注よは。大石ゑ有れむ。古よ已はゑひ。と通へる の り。万於の書やう此よ準ふべし。おほ

於と云ゑ紀に平聲。に已ほ山と云ときは上聲。おほ野と云ゑきは去聲ふゆ。去とて。に字ゑらゐて。をゑ書こと の し。伯母をむと云は上聲。小女をゑ。と云は去聲。是はと聲ふよりてを。ゑに。ゑを替ふ事 の し。いねえ。ゑも是ふ準ふぼし。此の如く三聲は本に はく有已。入聲に和語ゆ安ぼて の し。篤胤云。語意考ふ。日の入る國に。あゞ音もて云ひ。此國に言を專として音は次とに。そを何と云ふよ。ゆゞ國ふ生はく。兒。あ。に音を出せはより。幾むくも經ゑし言をき。得二とせ計りの程よめの云めに。然て其言を國所の乃ふ。習ひて。遂ふ其地の音をふせゆ。故音は言ゑ已末とに るあり。是ゑ此言の國に ちるし也。に。然るを今に世人。らゑ字の音をふ乃。ふ聞ふらひて。其を以て。あ。の言をも音ゑも知むとに き。ば。否らぬ事と成ぬ。是國上つ代に元ゑゆふて。彼らゆ國の字を借て。ものを書ちるに時と成ふてを。其字に音ふ拘に ら ぬ事に。古事記よ。宇比地迩上神。次妹須比地迩去神と有

て始めて上声を注し次て去声を注しとれど書る字をば異ふせざりはと阿那迩夜志愛上袁登古ちふ袁登古の袁て去声なるをおゝよハ上声よ唱ふまども字て別ふせば此外ふ言便ふをゝ正て音の異ふあるゞ多ゝれど本れ言の假字を替ふる事あきは紀あどれ訓を注せし字まと常云ふ言を以ても思ひしまゝ譬へば加茂も平声也万も平声ふ正然るよ加茂山といふ時は去声よ唱ふまど字て替ざるの如しまと万葉よ載とる東歌てみふ東音よて訓出せしを其ゝける假字は京哥ふかくふ達ふ事ふし佗国よても一字の音と連声て別れまど音ふよりて字て替ざ正と見もるを唯それ一字の音を守りておゝの假字を誤正ふく人あはて論ふよも足ぬと云まとるも同意ふり正ふく

假字れ混ふゝは五十音れ中ふあやわ三行の内を出ぬ以呂波ふて此中ふ伊衣宇の三音ふ省きて残る十二字の内以爲江恵袁於の三對六字これ用ひ別ぬき字ふ正其外はひふへほれ中よあ正てわいうえをと聞も音便まと障

泥あふ正葵あふひ等れふのをれ如く聞え生うはれ埋うめれ等のうれむふ混ふゝ等ぬふし心を扨くまで知正易知ふりと云ふ皆理とる説等ふ正要略ふ此文の末よ字を反ふ二字ふて反ふ上を切字といひ下を韵字といふ下の韵字よて平上去入て定まれど和語よて書と知其て用ふし上れ字ふていふえぬおを等を分ふり云くを謂へれど此て師の字音假字用格ふ假字て反切ふて分ふゝ事よ非ぬ契中て かて の正用ひ定めて唯一ぬとりの理を以てぬと定めとる説と見えて其證例ふ挙ふ字れ反切ぬでよ其假字よ合ぬはし て其餘をも強て反切を以て分ゝむとふらず韵字ふをるぬし韵字とて下の字を云ふ喉音の三行ハ韵字よて分ちふゝ所由は無ふしも非ぬと云れとる如く非説ふ正

て上件れ説等みふ五十音れ假字ふ就ての説れる中ふかれ和字用例書の説て其とて云ふど全く明魏法師の平上

去れ三聲ふ〻ゐて假字を定むとふ說よ創意せゐ物ふゐ。
爰ふ契冲疾く其創意ゑくみ知ゐて要略ふまげ明魏法師
れ說を破ゐ然して近頃の人〻れの事はおや〳〵知ぬゲ
ゞて用例書の非を辯じとゐふゐ然るふ其明魏の說まと
根據ゑゐ所あり然るた其反切義解れ自序よ天平勝寶年
中古丞相吉備眞備公取通用四十五字省偏旁點畫作片假
字抑四十字音響反阿伊宇江乎五字此乃天地自然之倭語
焉是故竪列五字横列十字加入同音五字爲五十字世俗傳
稱之云吉備大臣倭片假字反切有其口訣矣然後弘仁天長
年中釋空海造四十七字伊呂波四十五字增補於韋二字以

便于女童其體則草書也予學和歌樂音律其餘力竊注已意
名曰倭片假字反切義解聊述由緒冠假字首云爾とゐ。此た
今の考說よ要ある文れみを甚く約めて引出とめ委くは
本書を見ゑ然て今挙る文の取總さる意た吉備眞備公世
ふ通用れる眞假字四十五字れ偏旁点畫を省きて片假字
と作せるふ其四十五字れ中よアイウエヲの五字を除き
て四十字は長く引呼べゞ其響ミふ阿伊宇江乎れ五音よ
反る是故よ竪ふ同音五字を列ゑ横よ同韵十字を列ゑて
音圖ふ作らむとれるふ五字足ら安是を以てイウエヲイ
の同音五字を加入して五十字とれし始めて音圖を為さ
るを世俗よ傳へて吉備公の倭片假字反切と云ふ即其口
訣あゐ然て後ふ釈空海れいろは四十七字を作れる時ふ
其音圖のワ行のヰを於よ改め ヤ行のイ れ韋よ改め然し
ていろは假字を作れゐ今ゐれ和哥音律多ゑしむ餘力よ
其意を注安と云るあり注とた乃謂ゆる義解よて片假字
の傍よ其本字れ書添さるを云ふ其本字當り難きもとの
はと此外よ假字反切音義假字音義方位伊呂波字畫解ふ
ど云る條くあるも明魏の所為よて誤あゐ今の要ふも非

ざれむ。都て抄さぶ。かくて其吉備公れ音圖。及び其口訣のさは斯の如し。○今按ずるに。

○假字反切口訣

上父字行竪下母字行横其隅生子字。

例　伊上父和下母反阿隅子

亦　也上父宇下母反勇隅子

横行歸父字竪行歸母字其歸生子字。

例　阿上父和下母反阿歸子

亦　也上父勇下母反勇歸子

○□内五字序所謂同音五字是也。

改乎伊作於韋者。空海所爲也。

此反切の口訣れ。上ふ舉さるに和名抄れ音圖れ字切と。其文こそ異ま。全同じ說ふて。今は誰も知る如ふまだ。殊ふ論ふべき事も無れど。是五十音圖を吉備公

アイウエヲ
ワ[イ][ウ][エ][ヲ]オ
ヤ[イ]干ユエヨ
ナニヌネノ
タチツテト
ラリルレロ
ハヒフヘホ
マミムメモ
カキクケコ
サレスせソ

れ作と云ひ。後ふ空海のヲイを改めて。オ干と爲さゆと謂ふは。疑ふく世俗の妄傳ふて。此れ明魏よゆ前ふ。和名抄をも知ぬ。嗚呼れ歌人ふどの。少ゃ音律を樂めるゞ。古言れ竪位の。アイウエオれふ由茂僅ふ聞ちゆ。かれ管絃音義ふ。乎を阿行ふ置さふを。生狡意ふ取用ひて。此圖茂作まるふ。元

よゆ音韵の本義を知らず。喉音三行中れ十音ぢ。同音重復と心得とゐ故ふ。此音圖を作るふ。同音五字の加入とは云、ゐあり。豈ゑれ同音ゆらむ哉も。案よむ阿行れイウエオむ正喉音和行む平ウヱヲふて。都て発声ふウを帯び。夜行む妄ぢて発声よイを帯びて。其イエ。案ふはイイエと云べく。二行共ふ拗音ふるゲ。其呼法。音義各く差別ある事ふゆ。委くい第五條。喉音三行論の所よ謂ふを見て知べし。然るふ此を吉備公れ作と爲とゐむ。今用ゆる片假字ぢ。舊く彼公れ作と云ふ説ある々ゆ。如此誣とゐふゆ。吉備公ゆふ。喉音三行の差別を知らぬ人ふらむや。然るむ此公ゆふも天平勝寶れ頃。世ふ在し給へるゲ。元よゆ多才れ儒者よて。渡唐留學二十年計よ志て。猷まで彼邦の韻學をも學び得て歸朝せられ。

天皇れ漢籍を讀み給ふふ。御師と爲し給ひしゐどの達學ふるふ。此頃殊よ。音韻の學びれ盛ふゆし御世ふる歟。此公いゐで。其道ふかく拙ならむ。深く當時の趣を想ふ。ゑきふゆ。凡て学びと云ふむ。元よゆ知ざる事を眞似ぶゥ。或む何の道ふまれ。衰へとる時よ。そを再興妄ゐゐを云ふ事ふるゲ。皇国元より。音韻言語の道れ学ふき許り正のりし事。天平五年よ奉まる出雲風土記よ。郡郷の名字を改め給へゐ事を記して。神亀三年改字某と謂へる。拜志。惠曇。伊農。玖潭。塩冶。斐伊ふどの類ふる文字ぢゥひ。盡く音韵の道れ自然ふ合へるを以て知ゑく。況て此。天平七年よ。吉備公帰朝の時よ。彼土の袁晋卿と云人を伴ひ來れるふ。此人れこと。空海れ性霊集よ。誦。兩京之音韻。改。三吳之訛。響。口吐。唐言。発揮。嬰学之耳目。といひ。続紀此人れ傳よ。学得。文選爾雅等。音。為。大学。音博士。とあり。吉備公の事を。三善清行。朝臣れ異見封事ふ。恢弘。道藝。親。自傳受。郎。令。学生四百人。習。五經。三史。明法。筭術。音韵。籀篆等。六道。と有ふて。音韵の道ふも卓れて在し事を知べし。於乎の所属をも知らず。ヤ行ヲ。をおき。彼

十音を重復と思へる類ひの韵学よりて。其道を親自傳授ふる甚き物うれ。亦是られ文等ふて。此頃殊ふ音韵学の盛れ已し趣をも知べきあり。扨まと釋空海れいろは歌を作る時ふ。此音圖れ和行形るヲ戎改めてホをふし。夜行れイ戎改免て平と爲と已と謂ふも。亦元より已妄説ふて。空海あふ然る愚僧ふらむや。法師れごらも素とゆ奇才れ性よして。渡唐留學の年久ふく。漢學ふ頗ぶる長々て詩文を能し。かふ彼悉曇れ學は。其謂ゆ体密宗れ專と体道ふて。雅言ふ阿字本不生やゞて此音韵れ學れるを。爭でう於衰れ所屬を錯已。夜行ふ已。れ在るを改めゞ。却已て其イ戎平ふ改むる。蒙闇の所爲ならむ。此れ彼以呂波歌を。空海れ作と謂ふよ。此圖を其歌ふ校出れむ平ホれ二字足ざ体故ふそ戎補へる後人の妄言れるふと疑ふし。悉曇章の学よてむ。喉音三行の差別れ諦ふることと。己ゲ印度藏志より委く説き。学者みふ悉曇の義を。心得さる時ハ非ぬど。空海法師は神字日文傳よも。其要領を云ふるよを知べし。空海れ世頃む。其宗れきむ。諦ふ知てぞ有々体。其む喉音三行の声を知こと諦ふらでは。梵字を以て。梵語を書こと能むざる事ふる。を。空海の梵書れ更ふ。彼いろは哥の。假字ごろひの正し。れ。ふも思ひ合せて。此学より拙らぬ事ハ知ゞきふり。斯て此法師れ。いろは哥を作れ已と傳より謂へ已。ちて此吉備大臣れ音圖と云ふ事の由む。日文傳より謂へ已。云ふれ。斯れ如き妄誕の物ふる戎。明魏のいろふ思ひ惑はき在々む。此をしも甚く信じて。其義解を作已。かふ是より已思ひ立れし事と見えて。古れ假字ごろひを破ゆて。彼いろを れ。えふれ同音ふて。差別ふしと謂ふ。臆説をぞ述られけ

流。此事ハ。むやく契冲法師と。縣居宇斯の辨說あ。て。上ふ出せるゞ如し。此ふむ多ゞ。其根據せる由來を云ふあり。門人云。此臆說ふをゆて按ふふ。明魏元よゆ此臆說あり。て。其を推立むゞ為ふ。上の音圖を自ゝら作。て。吉備公ふ託けられさるふむ非じゝ。と云へ。て。旁痛き事ふむ有ま。ど。然も云はゞ云ひもに。ぢし。けて右反切義解れ尾ふ。花山耕雲散人。明魏愚草。とれみ記して。年月む無れど。應永年中ふ出家して。山城の花頂山ふ住に。と云ゞバ。其年頃ふ作られし物ふ。て。斯て其奥ふ。右一卷搜求舊庫反故中。而手錄以歸庵。倩見開祕密之奥藏。示權實之正軌。而有益于後學。功不少矣。云く。元和庚申歲。阿闍梨良正と。ふ。て。庚申は乃元和六年と云ふ歲ふて。應永の末年ふ。て。二百年ふむ足ら。ず。此頃ふ。ふ今有る悉曇れ。横位ふ因れる音圖の無。て

し事。ふの密宗阿闍梨れ。ふを珍重せる趣ふて知ぢし。其む今有る音図を。常ふ見ふまて有。ましゝ。右の偽図を。如此しも感まじき謂ふまむれ。て。此次ふいま一ふ奥書あ。て。其む既ふ上の分注ふ引さめき。然るふ其後い於の程ふ。何人れ所爲ふるゝ。右音圖れ横位をむ。悉曇ふを。て。アカサタナハマヤラワれ次第ふ作。て。改ゑと。て。其圖の物ふ見えとふむ。寛永五年ふ彫さる。小板の韻鏡れ首ふ出せふぞ初ふる。其音圖ふぎり記ゑゞ如し。此む悉曇の竪横次第ハ知ゑれど。オヲ。エヱ。イヰれ差別を知ざる人れ所爲ふるふと。アヤワ三行ふ同じイヱを用ひて。ヰ字ふ。て。ヰ字ふ。て。故ふ。二段の合拗音れ假字違ひ。エ字れき故ふ。四段の開拗音假字違へ。て。是ふ。て。前享祿元年

五音五位之次第

ワ ウヤ ウワ	ラ リヤ ルワ	ヤ イヤ ユワ	マ ミヤ ムワ	ハ ヒヤ フワ	ナ ニヤ ヌワ	タ チヤ ツワ	サ シヤ スワ	カ キヤ クワ	ア イヤ ウワ
イ イ、 ウイ	リ リイ ルイ	イ イ、 ユイ	ミ ミイ ムイ	ヒ ヒイ フイ	ニ ニイ ヌイ	チ チイ ツイ	シ シイ スイ	キ キイ クイ	イ イ、 ウイ
ウ イユ ウ、	ル リユ ルウ	ユ イユ ユウ	ム ミユ ムウ	フ ヒユ フウ	ヌ ニユ ヌウ	ツ チユ ツウ	ス シユ スウ	ク キユ クウ	ウ イユ ウ、
ヱ イヱ ウヱ	レ リヱ ルヱ	ヱ イヱ ユヱ	メ ミヱ ムヱ	ヘ ヒヱ フヱ	子 ニヱ ヌヱ	テ チヱ ツヱ	セ シヱ スヱ	ケ キヱ クヱ	ヱ イヱ ウヱ
ヲ イヨ ウヲ	ロ リヨ ルヲ	ヨ イヨ ユヲ	モ ミヨ ムヲ	ホ ヒヨ フヲ	ノ ニヨ ヌヲ	ト チヨ ツヲ	ソ シヨ スヲ	コ キヨ クヲ	ヲ イヨ ウヲ

ふ。始めて板ふ彫と伝韻鏡
よた。此音圖有事れし。享祿
元年よ已。寛永五年までた。
百一年れまで。是間ふ伝人
の所爲と見えと已。彼明魏
れ音圖の奥書ふる元和庚
申年をゆ。寛永五年ふ至ゆ
て九年ふ已。享祿板の韻鏡
た宋板を翻刻せる珍本れ已。其尾よ韻鏡之書行於本邦久而未有刊者。故轉寫之訛。烏而焉。焉而馬。覽者多困。彼此不一。泉南宗仲論師。偶訂諸本。善不善者。且從。且改。因命工鏤板。期其帰一。以便於覽者。且曰。非敢擴之。天下聊備家訓。而已於戲今日家書乃天下書也。学者思施享祿戊子孟冬初一日正三位侍従臣清原朝臣宣賢とあり。此た岡本保孝主の藏本を借覽せるふ已。是ゑ已後ふ。寛永十八年。明暦二年。寛文二年れ板本共ふ大本れるゞ。其首よ添とる音圖。開合の拗音も。右り一字も異ふらゞ。其後元祿六年ふ。校正韻鏡とて彫と伝大本ふ。始めて平。エ。オ。れ字を出せれゞ。其圖まと次ふ舉るゞ如く。イ平。エヱ。オヲの所屬を違へし故ふ。二段四段れ拗音開合みふ違ひ。五段れ合拗音も違ヲ已。然るを世よ其非を知る人ふく。傳は已來ふ八已。蓋そた。其素本どもふ附と伝図の誤然るふ非ゑ。其韻学先生等れ作きる。末書どもの多ゝるも。皆其誤図を承とる図等ふきむ。此頃までた。韻鏡学者と聞えしも。ふ不喉音三行。開合の差

五音五位之次第

ワ ウヤ ウワ	ラ ルヤ ルワ	ヤ ユヤ ユワ	マ ムヤ ムワ	ハ フヤ フワ	ナ ヌヤ ヌワ	タ ツヤ ツワ	サ スヤ スワ	カ クヤ クワ	ア ウヤ ウワ
イ ウイ ウイ	リ ルイ ルイ	井 ユイ ユイ	三 ムイ ムイ	ヒ フイ フイ	ニ ヌイ ヌイ	チ ツイ ツイ	レ スイ スイ	キ クイ クイ	イ ウイ ウイ
ウ ウウ ウウ	ル ルウ ルウ	ユ ユウ ユウ	ム ムウ ムウ	フ フウ フウ	ヌ ヌウ ヌウ	ツ ツウ ツウ	ス スウ スウ	ク クウ クウ	ウ ウウ ウウ
エ ウエ ウエ	レ ルエ ルエ	卍 ユエ ユエ	メ ムエ ムエ	ヘ フエ フエ	子 ヌエ ヌエ	テ ツエ ツエ	セ スエ スエ	ケ クエ クエ	卍 ウエ ウエ
オ ウオ ウオ	ロ ルオ ルオ	ヨ ユオ ユオ	モ ムオ ムオ	ホ フオ フオ	ノ ヌオ ヌオ	ト ツオ ツオ	ソ スオ スオ	コ クオ クオ	ヲ ウオ ウオ

別を知ざる字見ばべし。かくて契冲師の正濫抄を著せるは。元祿六年といふ歳なれば。其音圖は横行に。安加左太奈波末也良和ふて。阿行を阿以宇江遠と著し。加行以下は。悉曇半滿の法を用ひて。也行を。也夬切也以 埀切也宇 埀切也江 畫切也遠 和行を。和契切和以 犁切和宇 犁切和江 饗切和遠 とや

うふ書て。右の圖。梵文ふ準へて作まゆと云ひ。悉曇半滿法と云こと。委くは印度藏志。神字日文傳外どよ。記せるを見るべし。此は然はるふ契冲の所爲ふし有まバ。上は圖等ふ比ゐては。越なく正しく。悉曇圖ふ近けれど。此もなれおをの所屬を錯れる事ふ心著ざゆゑひ。其は近く悉曇字記よも。丑阿の伊ろ甌マ藹ろ奥と有るを。何ふして誤ゆゑむ。訝し。如事なひ。正濫抄一卷ふ。假名の樣を知ゐし。諸越の韵学は安べて知侍ら安。天竺の悉曇も。ひなゝふ梵字をかく樣を習ひさる許りふて。むゝむのなき事は知侍ら安。云くと云へれど。梵字を書ことを知ひて。は。此所屬を誤まるべきこと。反くもいぶかなき。然れ事ふて。ぬと誤はまじ。如物ふは非安。此所屬を誤りし故ふ。五卷ふるアオワヲを。隅ちゞひふ通ふといふ說は。辛くて云。出とひき。然むれ此人ふして。是過ち有しハ。甚く惜

き事あり。但し於袁は所屬は正し敢ゑず。イ平エヱは所屬は
已ふ改まひて。正ふ近く成ぬる事は。悉曇ふ據れる故のみ
ゑ非ず。大かゝ本朝の古言を攷ずゑ力ゑ因き法こそ。正
濫抄。同く要略は二書は見て知べし。然るふ仍心はそき倫
は。其正ゑ就こと能はず。そは彼和字用例書といふ書を著、せる人あゞ是あり。其五音五位と
いふ図ふ。假名直拗共ニ通用とて。ヲポの所屬は違へるは更
あり。元の如く。ヤ行ゑ井ヱを置き。ワ行ふエを置てぞ有ゆ
る。況て一向は韻鏡學者あぞは。殊ゑ拙ゝ法時也しゝば。是
をヱ後。元祿九年の板本韻鏡ふも。右は誤圖を出し。延享元
年と云年ふ。彼沙門文雄ぞ校本の。磨光と名けし韻鏡さへ
ふ。尚未喉音三行は所屬。そは開合は知ざふ得知らで。甚濫あ

法事どもぞ多ゝ法。其は韻鏡の上ゑ。喉音三行の差別。殊ゑ諦ある事は。此僧そは諸字の
開合ふ闇く。ゝ於其假字をも。此あゞ仍知ざヱし故ゑ。開合
の轉うち混じて。イヱヲ法のみ用ひて。平エオを用ひざる
ゑて知べし。案は。イエオは開音。平ヱヲは合音ぞ。然法
差別あき書をし。豈とをを韻鏡と云むや。然きバ磨光あゞ
は云ゑくも非ず。然るゑ彼太宰純をいひし儒者をはじめ。
此を韻鏡中の精本と心得とるは。旁痛き事ぞり。韻鏡案ふ
は。正保ゑヱ後は板本みあ宜ゝらぬ中ゑ。磨光は文字ゑ関
合の差別あく。假字を付と法あと殊ゝわろし。此事ああ下
ふも云ふ。
を見を。
ちて此間は。我ゞ縣居宇斯の眞盛ふ。古學を世ふ
唱られし年頃ふて。荻生茂卿ゞ弟子あヱし服部元喬と親
ゝき友ゑて。彼ゞ歌ゑ免る時は宇斯ふ語らひ。宇斯の詩を
作れ法時は。彼ふ語ひあゞ互ゑ隔ぬく交はヱ。彼家ふて。太
宰純まと文雄僧ゑも。時く出會給へ法事も有ヱて。彼圃意

考は純ゞ言ふおきて書ゐ万ひ文雄と音韵ゆこゑの論ふ及びし事も有ゆと橘千蔭ゞ我れ父枝直ふ知〳〵持て法由ふて己ゞ若き布ゑ語ゆ。令聞さ法事あゆ。宇斯自筆の詩集いま清水濱臣ゞ持て有るあり。元喬と親しかゆしも共ふ老子をめおる意の適と法故れゆを云ふも。然も有るべし。其も元喬つ祢ふ弟子らふ。道の微妙を知るおきは老子あり。聖人の教といふ物も。小兒ふ。たまむまは。喰こゞさぬ物と云ふゞ如く。道理れ精微あるふも非ゑと云〻法とぞ。此も湯淺元禎ゞ文會雜記といふ物ふも記せるおゑを覚ゆ。まさ囲意考も。純ふ示せる書ゑ云ふめ。宗ふ然法べし。其も彼ゞ書さる辨道書と云ふ書の病ふ。よく當りて聞ゆればあり。因ふ云はむ。宇斯中年よりして。王義之ゞ書を好みて。其天朗帖といふを好み習はれおゞ。彼東江源鱗といふ書家を安〳〵免て。義之ゑ習ゆせ。彼の小野道風の秋荻帖を。二度板ふ彫さるも。宇斯の教ふて有ゆしと。此も宇斯の旁ふたきて。万葉考を彫し免給ひし。井上清風といふ彫刻師ゞ。若き布ゑの事と

音韻開合假字之圖 拗音

ア イヤ ウヤ	カ キヤ クヤ	サ シヤ スヤ	タ チヤ ツヤ	ナ ニヤ ヌヤ	ハ ヒヤ フヤ	マ ミヤ ムヤ	ヤ イヤ ユヤ	ラ リヤ ルヤ	ワ ヰヤ ウヤ
イ イイ ウイ	キ キイ クイ	シ シイ スイ	チ チイ ツイ	ニ ニイ ヌイ	ヒ ヒイ フイ	ミ ミイ ムイ	イ イイ ユイ	リ リイ ルイ	ヰ ヰイ ウイ
ウ イユ ウウ	ク キユ クウ	ス シユ スウ	ツ チユ ツウ	ヌ ニユ ヌウ	フ ヒユ フウ	ム ミユ ムウ	ユ イユ ユウ	ル リユ ルウ	ヰユ ウウ
エ イエ ウエ	ケ キエ クエ	セ シエ スエ	テ チエ ツエ	子 ニエ ヌエ	ヘ ヒエ フエ	メ ミエ ムエ	エ イエ ユエ	レ リエ ルエ	ヱ ヰエ ウエ
ヲ イヨ ウオ	コ キヨ クオ	ソ シヨ スオ	ト チヨ ツオ	ノ ニヨ ヌオ	ホ ヒヨ フオ	モ ミヨ ムオ	ヨ イヨ ユオ	ロ リヨ ルオ	ヲ ヰヨ ウオ
開合	開合	開合	開合	開合	開合	開合	開合	開合	開合

て語ゆさ。然れど文雄ゞ韻ゆれゆ。學はも宇斯の義論ふ。啓發せ法事め有ゆしゃ。或も彼正濫抄も世ふ知法〳〵時也しゃば。其圖ゃも因れゆと見えて。寶暦四年ふ著せ法和字大觀抄ふは。其誤を粗正し改免てゞ有〻法。其音圖かくれ如し。然れどヲオの所屬ふ布違へる故ふ。第

五段は合拗音みな誤れり。但し此は彼文治元年ふ記せはは管絃音義ふ。始めて錯置せはとり以來六百年ばかり。世間なほて誤り來きる事ふし有きだ。文雄をれこ難むべ切ふも非ず。我ゞ宇斯と呼る宇斯等ちへふ。其誤りを承りて。安永年間まで。なを純正ふ至らず。先師鈴屋宇斯ふ至りて。始めて其所置の錯りを悟り。字音假字用格を著はし。おを所屬の辯を作ふて。其用格の祕蘊を開示し。天下は音韻言語は道を學ぶ者は眼目ぞ開き賜ひ在りはは。此は實ふ安永四年といぬ歳ふゆりり。乃宇斯の自序ふ。時者安永之四季書竟られさるは。其前年ふること知ふし。かくて此を彫を矛て世ふ出されとはは。同じき五年をいふ年れゆりり。

然はふまと同じ年間ふ。京ふ。富士谷成章といふ人ありて。其門人ゑ筆記せし為て。あゆひ抄を云書を著せはふ。五十音圖を經緯圖と名けて。阿行ふ於を置切。和行ふ袁を置きて。世ふ經緯の理を知らぬ人。あ經のたもじを和經ふおは切。和經はをもじ我あ經ふ置くは誤ふゆ。師說とてぬきの辨ありと記し。其書を板ふ彫とはは。安永七年といふ年れり。此人のこと。師の王勝間ふ。近きころ京ふ。藤谷專右衛門成章と云ふ人有りゝ。それゞ作れるかざし抄。あゆひ抄。六運図略ふぞいふ書等を驚のきぬ。其をり前ふもちる人ありとは。ゆの聞とゆ。ふゝど。例の今やうは。うい撫の歌ふみあらむと。耳ふも立ざりしを。此書どもを見てぞ。知れる人ふある樣を問しゝむ。此近きゆぞふ身まかゆぬと聞て。はとの辨ふ云れぬ。万葉ふりあゝとの事は。いゝゞ有む知らず。六運の辨ふ云る趣を見る。古今集をりはあゝとざまは哥はや

う を能く見知まる事は大ゝさ近き世よあらぶ人あらじとぞ思ひ侯と称られし人れり。けて其脚結抄ふ。右れ如くは云へど。是よ已前明和四年八月板ふ彫と侯かざし抄ふた舊紀はゝ。袁茂阿行よ。於を和行よれさて。挿頭の詞を説さ已。是を以てあひ抄ふ。右のごと書さる た。鈴屋れ説を襲ひ取れる也。と論ふ人あり。其れいかゝ有む。少後まては有ふまじ。期らず師を同按ふ已しも知ざゝら ず其れぞまれ。是間かく此所屬れ。古へふ復るぱき時の行れ侯りや有けむ。成章の子御枝と云、るゞ。北辺随筆といふ書よ。亡父云く。あ経のおわ経れを茂置さゲ矛來れるを。辨矛ふ。亡父云く。あ経のおわ経れを茂置さ以て。嚼唉を思ひ。まさめじ餘り反切れをしを思ひ。ゝ於催馬樂の譜ふどよも。をこそとのれ列のもゞを引芦安るふ。乎ゝと書ゞして。於くとれみ書さるふて。始免てこきを定

む。後の人よく見定免よと云へ已。此れを れ置所ふゞ為る事も。まさ他家ふ同説ふ。亡父かく書べきやうれし。猶かの字ふまれ已れ説ふども。ふゞ物のはしふ書れけおよて。今まで世よ示ちゝれむ。亡父れ説とれ知る人れよふ已と記せり。此れかの魯叟ゲ黨の身を直くれ侯類よて。宗然も有べく聽容れべき言よこそ。然る茂同じ時世ふして。谷川士清翁れも。山崎垂加れ流を汲免侯學者れ中よ。比倫ふき博覽のキふて。我師れ於袁所屬れ辯ふも。聞知さ侯人れるふ。況て悉曇韻鏡の事ふも。大抵ふ心得さ已と聞も為を。何ふ侯事よゝ。於袁れ所屬を改め ず。舊來の誤圖ふ據りて。古語を釋さ已しゝむ。其日本紀通證。まさ和訓栞ふどよ。不具ふ見も侯説ども多かり已。然れ有れ。書紀あ已し以來。通證ばゝゆ卓さる注書ふく。古訓を集免さる書の多ゝる中よ。和訓栞むかり富さる書れ有ことれし。是

をもて。先師も去年序して。石上振の神桙。古きを始め。今世の賤きを。おぎ。利鎌ふ狭渡る。眞柴れ枝の片葉まで。おちごちれ山れ。大峽小峽の繁木ゞ本を。畫わけ尋ね。至らぬ隈なく。世よ有とし有る言れ葉の。栞なるも物せらきゝる。とぞ称られゝ侯。

世ふ出てれち。天下れ學者始め。て。音韻の正理を知ひて。我ふみ古語を解く者を更ふめ。悉曇れ學者。韻鏡れ學者。ゐの蘭學者ち子ふ。皆皇国れ古言古音ふ徴して。其国〻れ聲韻をも。明ら免知る事と。れむ成ふゝ侯。其は悉曇の学ふてを。今しも圓明院れ行智ばゝひ精ふ侯れふく。韵鏡の学よてを。太田方む一のひ精しきを無きを。そ去皆我ゞ師れ説を見しより。出藍れ説なも起せるふと。此人〻の著せる。悉曇字記新釋。漢吳音図説ふも。蘭学よも。其恩頼の及べること。長崎どを見て知べし。はと蘭学生前父といふ物よて知られとり。何ふの■柳圃ゞ。遠しは侯き有功ふらゑや。此等の事ども。故ありて日文傳よ

委く云子ゆ。かくて五十音れ事ゑ論せ侯書れ。近ごろ種〻有侯由れる中よ。己ゞ見し一二を論はむふ。村田春海ゞ。五十音辨誤といふ物あり。此を其獨見のゑと書去それ。我師の説よ本ゑゝる舉ふて。中よ論ひ得さ侯事もれなふを非祢どはと却ひて贅言蛇足ふれ多ひ。且契冲を始め。宇斯さちれ。寃多侯ゑ紀事も多ゝまゞ。今れ因よ其寃を雪ゞ。其非説をも辨へて む。今を むゝし己春海ふ始めて遇さひ前よ。鈴屋大人ゑでよ身退ひ給ひしゝむ。彼ハ我ゞ師と同じ縣居の弟子ふ。當時の老者よも在ゑまば。益を得る事も有むゝと思ひて。鈴屋門人ある由を云ひて訪へ侯也ゝり。然るふ春海。己ゞ年若きを侮れ侯ふや。宣長を皇国の道といふ事を説くを始め。世人を誑惑ゑる偽学の徒ふめゑ。甚く誹謗しさゆ去ゝむ。師弟の間を。父子れ義有るゑ。子

ふ其父を謗ひ聞ける人やゝ有る。礼を知ざる人りこそと思ひて其後は訪ひ交成よ。其ゝ其書中ふ此五十音を我国ふ神代をひ有おし物のやうふ云ふ人あ

ふゝ心得ず。然ふ古ゑ何の書ふ出さふ。詳しき事ゝひ。篤胤云五十音を神代より有來しと云ふを何れ書よ出さるよりゝ詳しとゝ愚ゝひ初めふ出せる縣居翁の此五十聯の音を連ね云ふは日ゝ入る国よ習へひと云人あふとそ嗚呼ゝ

ふれ此国の古人言語はざらむや言語ふゝ天地ゝ父母の教ふり故ゑら交此五十聯の音も有めひ且ゝ思ふ人ゝ時代をも思はゑ已ゝ国ゝ古事をめ知らで他国ゝ事をふまゝふ聞て云ふるふひと云へぎも其言語ゝ五十ゝ音を出交何ゝ書よ記せさ人と云へぎも其言語元より五十音の活機ふるゝ

る事のゝるを俗ゝ俗ゝ其言語元より五十音の活機ふるゝ故よ後ふそ図せふ音の五十あふふひ但しこゝ五十音とゝみ云ふる言のふ〳〵ふ謂ふ事ゝるゝまゝと按ずゝば此ゝ五十音図を云〳〵と云ふる意ふらむゝ然てゝ語足らゝば其は唯五十音とゝみ云ずゝ口をゝ出る音の事とふり五十音図と云ずゝ其音を記せふ図の事とゝるを然ゝ知らざる

ふゝ下よも只ゝよ五十音とゝみ云へひ縣居翁鈴屋翁も直よ人の声を云とゝ知ゝ五十音をいひ図よかゝる文よは必交五十音図と云ゝれとゝ蓋ふゝ宇斯とちの文例を俟までも無く古しゝ知ゝとる文格ふるゝや。東麻呂ゝ

記されし物ふそゝ家ふ古ゝ伝へふの有しと云ゝれしゝ然も有らゝど。事ゝ上ゝ世をひゝ伝ふるゝき其ゝ荷田ゝ家のみふら交神道を伝ずふ家よゝ孰の家よも此五十音ゝ伝といふ物ゝ有るゝひ然ゝど其は皆後ゝ世ふ記せし物ふゝ。古ゝ学ぶ人の為ふをひ所をゝし難ふ思し。篤胤云東麻呂の記されし物とゝ何ふらむ己ゝ見しゝ先年清水濱臣ゝ見せとる荷田翁の自筆よゝ縣居翁ふ授々し伝書ふひ濱臣ゝ春海ゝ弟子ふゝ師ふも見せゝむ然る物を見ゝ〳〵左よ右ふ意よ適ゝひし事と見えゝ前よ引とふ古言様の凡例よ魚彦ゝ此事を云ふる所よ標記しゝ荷田の家ふ五十音ゝ古伝ありと云ゝ信らゝぬ事ゝり加茂翁ゝ語

意も未定の書よて。從ひ難き事多しと云ゆ。語意考のあ
精撰あらざる事て。於袁れ錯置を。未考へ知られぢ已し過
ちて更れゆ。其事をゆえて。思ひ誤られとる事もこゝら有
れど。初免て初躰用令助れ活用を示さきたゐ事は。前よ知
る人無已し明説あること。正よ其傳の存已し故あり。ゐと
中よよし誤已の説あ已ども。荷田。加茂れ二翁。あふ傳。あお
事を傳ゑ有ゆと称して。其偽已を售る大人等ふらむや。此
れ春海自から見解せぢく。古を能くも知ざる頑意なる已。其
師父の義をも思れ。畏くも。万世古学の祖と在に大人等
ふいゑき汚濁を付むとせし れゆ。然きぢ荷田。家れみふら
。神道を傳ふる家ゐれ。孰の家ふも。此。五十音の傳といふ
物あり。と云ゐも。頗ふる惡意を含める言れり。已ゝ於て餘
の神道家ゐ。然る古傳の。今考ふゐよ。我ゞ国ゐ。此。五十音あ
ゐる由を聞とゐ事ふし。
ゐ事れ。むゐし音博士れどれ。唐よ已傳へし物と思はる。其
れ唐れ世ふ始めて。胡僧れ七音といふ事歟云ひ出しを已。
音韻の學精しく成と已。其れ世ふ韻鏡の學といふ事れ。是。

時よ已起れ已。其ふろ我国の人れ。多くかしふふ行て。物學
び爲ゐきぢ。然る時よ已傳へしふて。其本れ天竺を已起ゆ
し事れるぢし。其れ佛經ふ。早く出とゐ事ふきぢふ已。篤胤云。我
ゞ国ふ五十音ある事はとれ。此。五十音図ゐる事はと云。意
ふるべし。然らぢは其音博士の唐音を傳へざ已し間の皇
国人れみふ無言ふを在ゆきといふ義と成れぢあり。然て
五十音図を。韵鏡よ習へ已。悉曇よ拠れ已を。は誰も彼もい
ふ事よて。今の春海ゞ説れ。上ふ出せる三音考の説よふゐ
同書の。博士を置て字音を正されし事といふ條ふる説を
も取合せ。舊板韵鏡れ首。れる宋の張麟之ゞ文よ有。沙門神
珙者。是書作。於此。僧云〻と。同代れ鄭樵ゞ通志畧を引と
るよ據りて云る事ふるゞ。此れ無稽の言ふり。其れ皇朝よ。
音博士をれよて。唐音を正されし當昔。かしふよは。樂曲う
は。七音を用ひしゝど。音韵反切れ学ふれゝ。ゐて其。説ふ如
事よて。此。学ふ。七音の説を立とるれ。南宋の世ふて。韵鏡去
ふれち其。頃よ成きる書ふゐゞ皇朝よ傳は已しれ。鎌倉の
時代れりし事。去べて論へる如。ふれぢ。此れかれ謂ゆる胡

椒丸呑といふ説よぞ有れる。此五十音と云へる物も。天地の自然の道理ふて。物の聲こ外是ふ洩ふ〜事外し。然きば何きの国の詞よ天も。延ぶも約ぶも云ふべき物ふ法べし。此も我国ふて出來し物ふら云ふど。此をもて吾国の詞をも。能く釋き知る也。

篤胤云。此五十音といふ物も。天地自然の道理よて云く。と云へるも然る言よて。云ゃ天地の自然ふる物外る故よ。我ゃ国よい。殊ふ自然ふ固有せしふり。然きも其を著せる図の。此方ふる。彼邦ふる。大抵同ゃらるべき事。これ亦自然の事ふ法ふ。其国の先後外どを思ひて。強ひて我国ふて出來し物外らば。彼ふ借さ法物ぞと謂ふ。頑心よふそ。

今吾国の學ばる人も。我ゃ国を尊むあはぬふ。異国の事をさ〜よ取用ふ法を。口惜し也事ふ思ひて。上代をぬ有し也。外ぞ強ひて云ふぬ。爭でかしふの事を。此方よ借さめとも。

吾ゃ恥ふゆと云ふ謂あらむ。とめかくも有法を有るぞし。無なを無ぬぞして。事を正しく云むこそ好けき。心せはく負心魂外らむも僻く云ふ也業外る法し。

篤胤云。こも荷田宇斯と。縣居宇斯とふ甚く當る言よて。一れさり然る事よも聞ゆれども。裡よは国を貶しむる意ぬ。其も皇国もしめ。元をり万国の皇国よし有きも。万国の事物も用ふべき限りも。借用ふるまでも無く。皆取り用ひ給はむよ。何でふ事ふき道理ふきど。はゞ暦法まさ文字ふどの類ひ。此方よ固をぬ有ふるを。其もちし措れて。諸越れを取用も給ふるふども。借用ひさめと云むも然る事ふきど。師説よめ法ふ如く。人の形を始め山川草木鳥獣外どのさま。此方も他国も大抵同くして。然しも異らざきバ。其を繪よ畫さるめ。互よ相似さるを。五十聯音めその如く。皇国ふも他国よも。自然ふ固有せ法ゃ故ふ。そを図よ撰せず。大抵同じ様とふる外ぬ。はさ有るを有るとし。無なを無なと為べきも勿論の事ふゃら。無な物なも有ぬを誣るは僻めるふきど。其は僻こ外が良も。国ふ案外る心をゆ云。形きむ憎らぬを。無き物をふしと云ふも

更あり。有無のあひだの判あらぬ。或は固より正有り。物も無正し趣より云む曲むとはる。春海が倫ある人等も世ふ多くの。それ上なこそ大倭見して見ゆ。裡の心は。陀国は奴隷ふて。我が父母の国をし。竝くより貶しむ法を見高き事よして。同じ意は世人らより。其潔きよしを示せむ為ふまバ。却正ゆハ甚ふくしや。そは春海が今云る言等。乃て其醜意ふて。元をゆ古を信ゆる心ふどは。露も無正し男ふれず。如此云ゆる裡の意は。荷田縣居二人の宇斯より。我が父羊を攘めりと。濡衣きせて。已が潔白ふる由を佗ふ讐らむと。構ゆ出さふ。其は上ふも下ふも論ふ事どもふ思ひ言よこそ。醜言合せて辨ふべし。

○五十音は阿行より乎を置ことは誤ふり。此は本居宣長が考へ出さる事ふて。謂いを明ふ正。ふは宣長が言残はさゆ。古く五十音は事ふ記せし物を見るふ。皆於を阿行ふ置ふ正。はと恵を阿行ふはくを云。説もひが言ふ正。是も正し。証ふ正。下より云ゆを見ふ。

駕胤云。岡本保孝ぬしの言より。春海が言より。宣長が言をはさゆと云、るは腹ぐろし。此はかの玉あられ論を書さる徒の。本居翁の玉霰丸の功能より。なりて。其論を書ふふより同じと云れき。此は知言と云べし。其は鈴屋のはを所属の辨を見ざ正し前より。はやく其由を古書を正見出て。下より記せる如く書連ねおきて。然て後より所属は辨を見さらむより。宣長が言を俟ゆとめ云べし。鈴屋の然る辨を見て始めて驚き。その驚ふる眼をもて見し故ふふそ。和名抄ふる多始ゆ。種くは書より。さふは所属ふるをも見出さ。然も爭むで。宣長の言を俟ゆと云ことを得む。かく腹黒ふる心を。負じ魂とも。妒心とも謂ふ。但し此は春海のみふ非ゆ。かの末輩大糞学者の著書。大抵かくは如し。凡て五十音は。字ふ正易き物ふふを。況て古は於乎衣恵ゆれぞの。位違ひふる我以て延約ゆ正せむ。誤いと多かふ正ふむ。初學は人惑ふふと勿ま。駕胤云。是まさ語意ふ出され

さる図より。於乎の所属を錯られとるより。当さふりて。彼考を人より信ぜし。ゆじと。構へし言ふるが。五十音は動ふ易き物と言るは。五十音図は動ふ易き物と云、る意ふふべ。ゆまど。縣居翁の当時まで。例は誤図の餘波よりて。おをの所属の。い

まゞ正し敢ざゞし故ゑ動かまゞ。鈴屋翁の校正をゆ後は其所属ゑでゐ古ゐ復せまゞ。此後万世動く事れし。然るゐ動き易き物と云るゐ。此後もゐ不動くこと有らむと殆み思へるゐや。初学れ徒かゝる愚説ゑ惑ふ事ゐゆまゞ。○

引聲ゐ阿行の五音を用ふ法事は。阿伊宇衣於れ五音は。音母ゑて。其餘の四十餘れ音。我れ聲を引と知れ。皆ゑの母音れ五音ゐ歸ゑるゐゞ。此れ自然れ理ゐゆ。いゐし牙国郡の名の一言れ法ゑ。文字は二字ゐ書ゑ法あゞ。其は奈良れ朝ゑゞれ定ゑゐゞ。其一言れ名を二字ゐ爲せるゐれ。其引聲れ字を下ゐ加ゑゆ。紀伊国備中国都宇郡。筑前国毗伊郡。薩摩国穎娃郡ゐどの類ゐ不多し。皆阿行の五音れみ用ひて亂まゞ。ゑれ字音れ自然ゐて。五十音れ上ゐ能く叶ゐるゐ

やはゝと五十音をいふ事。ゑでゐ世ゑ取扱ふ事ゐて。ゑゝ阿行の五音ゑ引聲ゐ用ひしゐても有ゐし。何まゐても此引聲ゐ用ひゑる音を本とゑて。阿行の五音を定むゐし。篤胤云。其れ奈良の朝ゑりれ定ゑゐゞ。続紀和銅六年五月の詔ゑ。畿内七道諸国郡郷名著好字を見え。延喜民部式ゑ。凡諸国部内郡里等名並用二字必取嘉名ゐど見えゑる御定をいふ。斯て此條の論ゑべて。鈴屋翁の字音假字用格。まゑ地名字音轉用例ゐどゑ。委く論ぜられし説を抄畧めゑる言ゑて。皆理れゑる事れゑゞ中ゑ。はゝと五十音と云。こと已ゐ世ゐ取扱ふ事ゐて。ゑゝ阿行の五音を引聲ゑ用ひしゑて。も有ゐし。と云へるのみれ。春海翁説ゐれど。此れ贅言ゐり。其れ是ゑり前ゑ。五十音といふ物れ。元ゑり皇国ゑれき事れるを。悉曇ゐゑりて立ゑる物ぞと云へる言ゐれど。今の文意れ。皇国言ゑ阿伊宇延於ゑ引聲ゑ為ゑ法は。悉曇ゐゑ。て。始めて知ゑる事ゐゑ。ゐらむと云へ法意ゐまゞれり。今れ五十音図ゑし其。れ。ゑ。悉曇ゑ因まる物ゑも不ゐまゞ。皇国の古言ゑ。元ゑ。其。差別ゐ。ゑ。ゐりし故ゐ。悉曇とめ符合せるゐり。然

きど和銅といひし御世頃に、いはざ悉曇の理をし、明らかに知ざる時あるをや。○阿行ふ於を置こと、阿行れ於を乎と改めたる。契冲が和字正濫抄よ。五十音れ圖を出せしよ。然著せし耳ふて、古くは無き事ふ。

あて悉曇の上ふどよ。ぬと思ひ誤ぬし物と見も。篤胤云、これ契冲よ取てて、甚く寃ふる言ふり。然るに喉音三行の所属を誤ぬしは、かれ管絃音義その嚆矢よて、次よ反切義解れ拙図あり。其をめして、悉曇よ校し改めさふ図ども、次くよ出おきど、仍正ふ得ず、法師の学者ふ、ふて、韵鏡を張行せる文雄さ、ず、其差別を知ざぬしを、然ばがよ契冲に、悉曇れ学も、文雄が倫ふに非ぢる故ふ、正濫抄ふ、大抵正し明せしが、文雄の大観抄よ、其図を用ひしこと、上よ委く論へば、がるが如し、然るふ契冲、何ふして思ひ落しれむ、悉曇ふても、於て阿行ふ、ふ物を、於乎の所属を改めざりしに、謂も上手れ手よ漏るをふ、水れ譬へれ如し、然るを春海、五十音図の、ちる沿革をも攷ず、謾よ契冲の為始めさふ事とし、この於悉曇れ上より誤ぬし物と見も、と云へるに、其悉曇よて

も、於て阿行、乎は和行ふる事ざよ知ざるふり、斯て口を開々む、悉く曇くと云ふに、是何れ言ぞや。古紀物ふは、定家卿の明月記ふ、阿以宇江於と記さ、釋日本紀よも、阿伊宇江於之五音相通といひ、まと天文年中の人れ書さ、ふ略本和名抄れ始よ、五十音を舉ふるよも、阿伊烏衣於と、ふるし、林春齋が類字假字遣の跋ふ、安以宇江於ぞ書ふ、ぬ然れむ古くとぬ春齋が比までは、於を阿行ふ置る事ふ、めしを、契冲より誤れるふと著し。篤胤云、阿行よ於を属せる證文どもを、能くもかくむ引出さぬ、但し此中よ、和名抄の始めふふと、釈紀ふるとは、古き所属の證とにるふ足れど、明月記ぞ、類字假字遣の跋ふ、賴のさく思ふ由あり、それ定家卿、哥をこそ能く作らきされ、其定められさぬと謂ふ、定家假字遣とも、行阿假名遣とも云ものを見るふ、イヰ、エヱオヲの差別ふぞれ知られ、ず、まと春齋れ跋を書さる、類字假字遣

と云ふ物なさ同じ類ひに。古假字に合ざる物なるに。況て春齋の書なる假字のみども。甚く假字の違ひて有れど。其正しと見ゆるは阿以宇江於め。ゆゑど無く書きさるにて。古へに據りて書きさなるは有まじく所思ゆきぞなり。然て此春海が見さる和名抄は。乃上に云へる。平山満晴が所藏の。天文本の写しれど。ちて和名抄に。和泉國日根郡呼唹乎。大隅國囎唹曾を有り。是みな於を引聲に用ひさど。上にも云へる如く。引聲はなくて。阿行の五音を用ふる事なれど。呼の引聲に唹と有るによ。呼は於くに在はく。唹はしに在べき事の。明かなれば是を思ひ契冲は此囎唹と有るを疑ひて。曾の引聲は乎なる字。唹とゐるは。彼國人の詞の重ぬ故かと云へるは。最おもなど無じ。於乎の所の違へる哉思はで。誤を助るむと爲るなき哉これき。國郡の名を二字に定め

られしを。詔ありて。朝廷にて文字をぞ定められしなど。然きは佳字に従ふべしと云こども。國史に見えざり。其國の人の詞重くとも。事に預かる官人の。其侭に文字を入ぬきやうなし。且是引聲の字を下にそふるは。文字の上の事にて。其國人の言に關かるどさる事にはあらねば。古言の例をれ告に。息を於支とも。愛宕を安多古とも云へる類ひ。伊と安を於と通はし云るは。阿行の五音通ひすればなり。篤胤云。和名抄に和泉國云くと云より此まではぞ字音假字用格の。おを所屬辨といふ條の抄畧にして。皆理のさる事の中に。本書にはさな。契冲大隅の囎唹す疑ひをなして。乎をかくなきず。唹を書るは。彼國の方言かと云るはいかゞ。和泉の呼唹などには心著ざどしにや。をも云れし後によおきて。於乎の所の違へるを思はで。誤どを助るむと爲るなそ哉こなきと罟きる言のみぞ。春海が言なる。抑和が師の書等に。契冲の誤りを正せる事の往くあるも。此人僧にこそ有き。眞心なれどしき人にて。殊に古学の基を起きゝ功績あきぞ。其心して論ぞきさど。其はかの字音假字用格のはじめに。數百年を經るなきど。假字なかひを誤まり來し事をいひて。然るに近世難波

の契冲僧始めて是を考へ出し。和字正濫抄を著せるより。古へは假字。再び世に明らかに成ぬるに。比類なき大功なり。とまれ云きさとり。契冲あるに誤りを助々むとして。然ほをこ言はる人あらむや。舊き所屬の誤まりは心著ざりし故に。ちと思ひ誤まるなり。然きだ此も春海が蛇足の過言なれども。○乎は和行に有ぬきに。止乎くきも多和くとめ。乎乃く久とも。和奈く久きも。多乎也米とめ。多和也米きも通はし云。りて居。字は訓を爲とめ乎里きも云ほに。乎里は約め爲なれば。是らみな五音を通はし云る例を見るぬし。於を和行なれく時に。於里は約め爲と。乎里の約りを伊きに成きり。然りては古語の假名みざきて解ぬき樣なし。篤胤云。是節まさ字音假字用格の七葉裡なる師說を抄略して。其解釈を加へさるれり。其に於を和行なれく時は。と云。るを以下是なり。然るに其言粗略にして通え難し。按ふ

ふ此に。於を和行なおき。乎を阿行に置と。於里の約り爲と。乎里の約りは伊と成れば。古語の假名みな乱きて。解ぬき樣なし。と云へる意なるぬし。契冲に此なきを和りは通らぬふ苦みて。乎きを和きを。阿と於きを隅違ひに通るぬし。きを云ほに甚だひ言形りは。いうで隅違ひに通ふと云なとは有べ。若きみ違ひに通ふと云はぬ。五十音何きは音に通はざる音なるぬき。此は契冲が私に意に思ひ計りを云ほ事に。音韵の上にかく云ふ道理に絶てなる事なり。五十音は通ふぬきは。堅は音に同行。横の音は同位のみなり。堅横の通音なりとも。古言は上に例なきをば謾に通に可らぬ。凡て古言に例にをりて。解ぬき物なり。篤胤云。契冲の隅違ひに通ふと云る說に。正濫抄五卷

ふ愛宕をあとごとも云ふよ就て此あとをも
通ふ様人よ尋ぬべし　たれ〳〵をぞを〳〵を云ひ已ゐ〳〵を
残れり〳〵と云ふ此已とをぞ通ふ様もれあじ隅違牙よ通
へ已犬をいぬ名ぬ息をいきなれ居を残る名是らも尋
ぬ法しと記し置て古て其私心よ定めと法考説よて非爻
元よ已彼おをの所属れ違牙法ふ心著げ已しうば如此通
ふ言のあるて何故と云ふこと思ひ定め難さる故よ己て
何ふ法由とも知ら爻知さる人も有ふむ尋ぬ已しと丁寧
反復して後生よ心を付ふ法詞ふ名ふ然れど是由て已おを
所属れ誤りを悟らざる限已て絶て知こて能はざる事ふ
る故よ縣居宇斯ぞ云然る丁寧の言を聞ぬ〳〵も思ひ付き
爻諦ふ云み違ひの通ひと定めて語意ふ阿行と和行と隅き
建ひう通ふて阿毛と於毛阿多期と於多蕃登乎く也多和
和袁乃く久と和奈く久れ類ふり也云きさるを鈴屋宇斯
よ至りて彼所属を古へよ復さきして契冲の心付よ創意せ
ふれし事よも有べし然るを春海其和ゲ師れ説のふり尾
ふ取ぬきて如此ふも契冲を拙き者ふ云るて情ふきわざ
ふり其て我ゲ師説の無りせむ更ふり契冲世よ出爻て春
海ゲ学も有まじ已を其好已る戎語よも食ぬきて器を破
已蔭よをそりて其枝を折法を情れき者の所業とて為と

已其て契冲を已次く大人さち出て導れさる迹を蹈ぬ
ぬ僅よこの辨誤計りれ著述ふ已し物を契冲と世を易さ
ら むふ豈それ琴後集ふる　○衣れ阿行よ有べ已は此て契
一首もひ法已出むやも

冲て誤らぢめし戎東麻呂の恵を阿行ふ置已しと云きし
ふ依めて師説め始已は其ふ據らきて冠辭考の部を分ぬ
にも恵を阿行よ出さきる已然れど後よ其誤已を知めて
改已られ彼語意れどふて衣を阿行ふぞ出さきと法

篤胤云此
一節全く春海ゲ説ふり荷田翁の恵を阿行ふ置べし云と云
れし事て春海の此言れくて我れを聞知べき事よ非爻然
きど此は疑てしく思て法〳〵事ふ已て必とて信られば其
て荷田宇斯の世よ和はせし頃ふ法て世よ有ふきさる図
は之れ阿行よ已を置さる図ふ已しうて彼家の古図の失
さるよ替て深く思ひを加ふる事れく用られ〻むを加茂
大人まと其誤りを受けて冠辭考を物せ已きし頃まで心
著きぞ在れるを其後よ契冲の正濫抄よ出せる図ふを已

て改られあるふに非じうと思はる其に語意考より出さまとる所属全く正濫抄あるを同じくまばあめ此に後人あほ能く考べし上に明月記以下に書等ふもみあ阿伊宇江於と云ふし和名抄ふ備中国下道郡弟翳勢と有ア所を世をいふ一言に名ふきバ引聲の翳を下ふ約々あめかく引聲ふ用とるふて衣に阿行に音れるを明ア所はと万葉巻十八に橘の歌より孫枝毛伊ゆゑと有ふに伊と衣を通ずる毛衣裁毛伊と云る外ア所はと巻十六に歌ふ雙六の采裁左叡とよみ後の物語あどふオ智の才をざえを云るも伊と衣を通はし云ふ外ア所はと複津といふ地名を万葉に歌より衣奈津とよみ和名抄より伊奈豆と有ふあど皆衣と伊を通はし為ふ例を知ア所し篤胤云此件尋常に人に然る事より思ふ所あれど此に説あア其にはゆ引声ふ用ふるイウ以曳に差別を知ざる説あア其にはゆ引声ふ用ふるイウエに亦アオと同列にて行の音あれど言に上より約くイウエふは喉音三行の差別ありはさ言の下より所るイウエに亦あ行の声より非ゆウに和行に声イエに亦行に声あり此は皇国に古言にみ然るより非ず諸越に字音ふ云も其差別ありる事あり其に春海ゲ挙さる采才あどにサイに音あるを亦サエと謂ふはや行のイエふて亦行のイエふに非ざるあア猶第五條より謂ふを合せ考へて暁り給へし　此伊を衣と通ふを也伊由衣與に行ふても通へば阿行ふ恵裁置ても同じ事あめと思ふ人有ア所々れど其に音韻の事を知らぬ輩外ア也行の伊と衣に韻鏡の上ふいふ塡聲といふ物ふて阿行に音裁ふ〳〵ふ再び置と云あア阿行より恵を置くとせず也行に塡聲も恵あらずは叶ぬ事外ア然あ

安時に。惠と以を通ふこを無れば。古言に例に合に爻。篤胤云。也行の伊を衣に。韵鏡の上に いふ塡吉といふ物ふて。云くと謂へるに。字音假字用格ふ。喉音三行辨を作ゑて。阿行のイエに母韵にして單音。夜行にイエに。拗音にしてイはイ。エはイエに重まる吉にて。差別ある事を。委曲に示し置きさるに。仍其旨を得ざゑしう。阿行の音をあゝふ再び置と。ふて。塡吉ありとに如何ぞや。抑韵鏡学者あどの。彼圓音を釈くふ。塡吉と云ふは。彼方に文字に多きに合せてに。音足ざる故に。必を有べき音を設おきて。其ふ塡る字音の出ふを俟ゑ由と聞もるを。也行のイエあに然る空し。に設けに吉ゑらむやも。宇斯さち猶引きて放さば。措れとき。阿行のイウエを。彼行のイエを。和行にウとに。後にこそ差別あきに如くあれ。甚上れる世ふに。諦ふ差別ありしと。春海が説の如く論へる。喉音三行に論を見て知るべし。ふてに。韵鏡に上にても。拗音の根元。更に立ざる物をや。心ふて道紀を得ざして。唯に口利く物云はむとに人の議論に。大抵かくに如に物にざりに。或説ふ。犬を惠奴とも云ふば。惠を阿行ふにくばしを云ふに誤ふり。かく證の數多あるを棄て。あの一をにみ證とし云ゑき事うは。ゑ犬を惠奴と云ふは。必しも通音をに云ひが多し。此に別ふ故あふばし。衣に阿行に有べきこと疑ふし。篤胤云。伊奴惠奴のあと。契冲をりして。宇斯さちこの外。二十卷の和名抄に。兼名苑云。犬一名。尨。爾雅集注云。狗。犬子也。和名惠沼。又与犬同と有るを。諸書ふ。犬狗共に伊奴とのみ訓るふ合せて。思ひ惑にも。今も人こふ此事ふ惑ふれど。彼五卷に本に。兼名苑云。犬。狗之有懸蹄。一名。猘。犬。多毛也。亦作尨。伊奴。尓雅注云。狗。犬子也。守禦畜也。和名惠奴。又與犬同と。ふり。漢籍説文に。犬を尤ふ作ゑて。狗之有懸蹏也。象形。孔子曰。視犬之字如畫狗也と見え。繫傳に。蹏。足趾也。高象犬之長體垂耳也と云ひ。曲禮注に。分而言之。大曰犬。小曰狗。若通而言之。狗犬通名。はさ尓雅。狗。字の注ふ。狗子。未生毳毛者。とも云ふ。此に音通の故ふに非ず。遂てに伊奴と云ふ。犬。子のいまざ。毳毛ふきを惠沼といふ。乃今も惠沼。古呂と云めり。宇斯多ち元をり。今云ふ。五卷の和名抄を見らに。然る惑ひも有べ。ふ。殘海に其本を見と。ゑと云ふに。二十卷に本に。然

る缺文ある事を知らで、はさ或説ふ悉曇は上りて、惠を阿
れ不惑へはた如何ぞや、はさ或説ふ悉曇は上りて、惠を阿
行ふ置こそ、正し証あるとと云はも信ぐ多し。春海むらし。
悉曇は學を委くせし法師ふ聞くよ。於乎、衣惠は別ち、悉曇
家よ傳へ多はた。諸説さはぐよて別ちが多し。古は先達の
此事を云るし置は物ふも。慥ふ定はるさる説ふしと云
ふるは。悉曇は上も、古は正し定め有し外ら。後世それ
傳亂れて、おお束ふく成るを物と見也。篤胤云、悉曇の上よて、是別ち諦ふる事、
悉曇字記一部を見て知るべ事ふるを、其事を能知ざ人
の生悉曇家よ問さはは故よ、ちる生答ふ為さる外は、然れ
ど此は論ふ
ふも足ぬ。今思ふよ。吾国の古言は解くふは。唯古言は通
ふ例ぞ。古は字音の例と云を以て定むるふ。悉曇の上ふ

は、然のみ泥むるは事外らば、其字音も、宋以後ふ記せる字
書ふぞは、古ぞ合はぬ。唐以上の書ふよるは、此方よ古をり
用ひ多る字音は、考ふ定むはきふり。凡て字音は、ふら
書よ知ひ馴さる事の、後世は字書よ洩さる事ふ、ま
さ字躰ふども、唐以上は字躰と、後世とは異ふり。顔眞卿が
干祿字書外ぞの字躰は、我が古は人の書る字躰よは、をく
合へど、後世は字書とは遙ふ別ふり。吾国は古の事は、もろ
こしの事よ、ふ知ひ知さる事は、唐以
上は書もて考ふ合はべき事外り。かは新撰字鏡ふどふ
出さは字音は、後世の字書とは異ふて、唐以上は書よをく
合多る外どを見て、古は古の字音は、かふらば唐以上の
書ふ據るは事を知るはし。或人は、新撰字鏡は偽書ふりと
も、はさ西土の書は上なも、共よよくも知らぬ業よて、多く
漫よ人り異ふらむ事を求めて云ふぞは、論ふりも足らば、

その正しき古書あるをしは字鏡考證ゐたはせり。おれ於乎衣惠ゐどれ字音の呼法ゐをゑ正て。正し紀分ち有はる事れ。本居宣長ゞ字音假字用格ゑ委く舉さゑ。披き見て考ふ法し。師の記されさる語意といふ書れ。それ身退らまをゐむ限ゑ。うゐぐ記し置れゐるゑて。猶考へ改らるべきを。然る事もゐき侭ゐまぢ。思ひ誤まられし事も多うゑ。ゐれ世ゑ廣むべ紀物ゐらゐ。うの隅違ひゑ通ふ例ゐどを記されしれ。契冲ゞ誤を承られしゐり。凡て師の常ゑて。已ゞ心を空ゐくして。人の說れをきゑれ。かしおく從れれゐきぢ。宣長ゞ說れ。かゐらゐ悅びて從はるべきこと疑ゐし。然るをゐう改めらはゐ。ゑ及ぢて。止ふしゐそ遺憾しれれ。寬政五年三月六日。と記せり。○上件春海ゞ說。それ要とゐる事どもは。我ゞ師れ字音假字用格を始め。其餘の書等ふ著はし置れさる說等ふ本ゐ紀。契冲の言。縣居れ說を其此と取合せ。万ゐ自かられ意をも打交ゑて記せはふて。上ゑ次く論ふ如く。非言れ多かる物うら。其善紀惡紀相竝ゑて考ゐ外むふ。初學びの徒うハ其益ゐ紀ふしも非祐む。今れ其書れ十ゑ八九を出せはゐゐ。此人れゞ師の世ゑ在うゐ。万世古學れ師さる由ゐど。反ゐ。師の身退られし後れ。人を師とい。本居といふ古狐ゑ計られ。ゐども云ひ。其琴後集を撰べる時れ。葛西質ふ按文して。師を風刺せしめ。清水濱臣ゑ按文して。雲れ往方といふ戲書を作し紀。此れみゐ己まち。ふ見聞しゐる事ぞも外。然れむかく。我ゞ師の說を憲章せる物ゐどの有ゐ紀しとれ。思ひ設ざりしを。近頃ゐ。岡本保孝主をう借見て。うゐ驚きゐ。中ゑ宇斯さちれ。寃さゐ紀き事どもの見ゐごし難く。むさ己ゞ知ゐる事をし。今云ひ遺うゐれ。春海ゞ言。後世ゑ弘まらむ時ふ。誰うも宇斯さちの。右れ寃みを雪ぐ者の有らむと。進る心の我ゑぬ止紀

難くてあむ。○ちて是頃或人むらし我が友とせし伴信友が假字れ本末てふ書ぞもて來て見せとゐこれ前ふ古史徵の開題記を物せし時はとヨ文傳を物せる時れど少ら力ぞも加とゐ人ゐゐ故其囑みふ依て何くれゑ其說等をも取容れて世ふ其名ぞし令知ゐゐ但し其說等の中ふ元をゐ己が意ふ合ざる事も有れきど其囑みの黙止がさき故も有しらむ己が說と並ゐ載して取舍れ見る人れ擇びふ任せとる也ゐゐ然れぞ今思ふむ後悔ふゐ事どもぞ多らる其事等れ別ふ著は安書等れ因くふ云ゐし此人素をゆ其著書ふ佗說を善惡ふれゐて佗說といふ事を好まぬ性ふれ有れきども己が開題記まとヨ文傳ふどは右れ故をし有きバ厭まで知ゆて在ゐがら少らも知らぬ氣ふて都てれ

假字れ本末ぞ證安とは云ふど主ゑは己が神世ふ文字あゐてふ說の裡を切ゐる書ふゐゐゐゆ其末を切とる說の當否れ日文傳れ訂正本を見とらむふ著き事れきむ此所ふは云れ爻但し日文傳の前本を稿ゐる時ふ彼反切義解ふる擬図を眞ふ吉備公れ創制ふて空海の增補せる物と思ひて其由信友ふも語ゐゐふ彼れ其時承ざゐしらぞ今其假字の本末てふ物を見きむ既ふ彼人れ說とふゆて例の比類ふき校合の才ぞれ極爻て其說を敷延し吉備公制作れ始めれ皇国言れ料ふ作きるふ非爻漢籍を読む反切の料ふ作られとる物ふふゆゆる物空海悉曇れカふ依りて圍ふゐ本音四十五字ふ於れ二字を增補して四十七字ふ為れゐ斯て其音図ふ拠りて今皇国言の奇ふくく妙ふ趣を解き明らむる上ふ取てはふ却りて漢字ふむ料ふも立まさゆて忌じき世の寶とふきるむ奇しきまで有功しく美ふ如思ひ兼ふこそれ有けれ空海の功も更ふまさ美ふしと云ゐ是謂ゆる音図を吉備公まさ空海の手ふ成れゐぞ云ゐこと余が舊の說ふゐを後ふむ上ふ論へる如く瓦と見て砕き弄さる說れゆ然る信友む前ふ信ざゐゐしらぞ今れ眞の玉と拾へゐさき

む此は己却りて彼が裡切を成せる謬なりと最をかし。蓋
その瓦か玉かの定なむ兩説をくらべ視て後に能く知る
淑人も
有べし。さて其書中に彼反切義解なる妄圖を吉備公の創
制にして空海の訂補と云ふ説を張行委曲せる中に上件
の己が考證と違ひて人々の兩端に惑ふべき事有ば此も
辨ずべきは有どこのらず其説に中むかしの書に音圖の阿行
に於を屬させるまゞ源順朝臣集にあいうえおを一音於
於初と終の句の上におきて詠る歌五首有ばさ天文丙
午寫本の和名抄に一本巻首云とて五十音を書入なせるに
も阿伊烏衣於まさ和爲有恵遠を書き。あむ順朝臣の草本
なれど小記されさる
ふか。又後人の書入
さるよこの詳ならず。はさ管絃音義にも阿伊宇衣於と書き。

釋日本紀にも阿伊宇江於之五音相通と云ひも有れど此
え釋紀の文こそ然も有れ。上三件ハ皆違へり。其はまづ順
朝臣集に阿行に於を屬さる證と爲るべき歌なしと云ことを。
我が覺えれき事ならず。見落しけむも知らずと思ひて其集
を再撿せしよ。果して然る證歌も有ける事なし。但し此集の
あめつちみ
哥四十八首と云へる。春八首ははじめよ「あらはちじぞ打か
なならむ小山田の苗代水よぬきて作る」あ冬八首の中に
「いおくともいさやならし浪立ふれる下なる草よかける蛛
のいうちわさし待あじろ木のいとひ我の名えてよらぬ
えれぞや心う「ゑごひなる君がはし鷹さがきれ野おなな
放ちそ早く手になす」思八首の中よ「おもひをも恋をもせ
せのみそ死なと、下かさなぞ拂なてば我」恋八首の中
に「えもいもで恋の乱る心かれいおこや石にわなるの松
のえをぐら山おぶおかれくも相見ぬるあなしかばかり
恋し死物なと詠める七首のかくちよぐに有のみなり。此

を初め終りの假字は次第よ並ぶれど。アイウエオヲを
れをは。此を爭でゝ阿行の音は正しは證と為るべき異
を云べし。もし然る證とれるべき異
本の有ふや。其は已ゞ知ざる所あり。次ふ天文丙午寫本の
和名抄よ。一本卷首云とて。五十音は書入とふふと云るも
違ずは。其は是謂ゆる天文本は和名抄。それ元本。いふ已ゞ
許ふ有れば。能く見知るゞ。其五十音は書入よ非ず。序文
は次。總目錄の上ふ記して。其卷を略て。全宗と云る僧の
筆れるゞ。元より順朝臣は載し置れとふ古圖ふふこと。一
目見て疑ふは物ふて。一本卷首云と云ふふ語は有ふを無
し。按ふよ。此は天文本の轉寫本れを見て。二十卷の板本
ふ。自から一本卷首云と書入を置さるを忘れて。如此は
記せるふ。然れど其分注よ。はは順朝臣の草本ふどよ
記さとふよう。又後人の書入さるよう詳ふら。と云る

狐疑をも。合せて刪るゞし。然る次ふ管絃音義ふも。阿伊宇
胡乱の音図よ非ざれれは。抑是書は。樂家の書れるゞ。
衣於と書は。を云ふふも違へり。
其道は人さふふ多くは知らを。況て常ふは見ふ人希ふは。
殊よ音圖とては有こを無く。唯ふ音韻の五十ある所以を
述る文は有る。其語よ拠きて。試よ圖を作れば。即已
ゞ上ふ著せる如く整ひて。阿宇伊乎衣はと和宇爲於惠ま
と耶由以與衣と樣ふ成りて。於乎は所屬を錯れる嚆矢ふ
ふ物まや。此等は事は。自己の考說を記はと違ひて。本據を
著は略文ふをば。殊ふ慇懃よ物せを。は有ふじは事れるふ。
斯の如き鹿忽は。甚く後學を惑は略態よて。酷わろは事れ

ア。但し是はと例の異本れるう。總て書れ学びふ異本校合も。いと好事ふた有ふまど。世ま校合家ふど称せらはゝ人の書とる物を見るま。其出所。まと何ちふ人の藏さる本。と云ふ事も知れず。打傾ゝはゝ異本も往くあア。然れむ屋代翁。狩谷望之ふど。何某何某はともゑまむ。偽異本を作て。證をはる人等ふ。を常ふ恚みき。或人問て云く。開題記ふ。伴信友れ説をも何くれと出ちまし故ふ。彼人れ名ぬ世ゝ知らまて。翁とは兄弟ふも比ふぎき睦ふる。ゑれ。誰も思ふ事れるふ。昔わゞ友とせしを有はた。按れ外れはは事ふて。最いぶゝし。爭で其由ゑ委曲ふ聞む。答ふ。篤胤元ふアア劣ふ。ア男ふは有まど。朋を交ハはは道ばゝアれ。小行を志履失ふる者ゝを非ず。我ゞ其道ゑ盡せはは言の。返アて彼人の耳ふ逆ひて。竟ふかくは成行しれア。其は爰ふ。委曲ふ

云ゑを事ふは非ずゝし。然れど如此のゝ云を。舊の中善ア。し事を知さる人れ。不審しむ心の晴まじゝれむ。此ふ云とも答ふを事を聊ゝ云むふ。其睦び初さるた。本居大平ふ紹介せしふて。文化二年二月九四日と云ふ日ふ。己ゞ鬼神新論を持て訪ひ行さるゞ初ふアゝはは互ふ学びの道れ意ふひて語らふふ。世の限アア兄弟とふりてと。大汝小汝神れ故事をも引いで云ふ。我ふゝ年も三ゑ計ゝ兄ふれむ。やゞて兄のごと思ひてふむ在ゝはは。斯て五六さび往來ゑゝる時ふめき。人国記てふ書をとり出て。ふを北條時頼ゞ記とた云れまど。後人の書ふるゞ。国国の人れ氣質を云ふる。ふを能くも合へア。其ゞ中ふ陸奥人れ事ゑ。氣質の倚尖ふはこと。万丈の岩壁を見るゞ如しと。て。次ふ出羽人れ事を。奥州をゝめめ健義ふる所ふアて。智も亦上ふり。武士た忠孝れ志ふアて。下を使ふふ法を沙汰し。下郎た上を敬ふ心ふり。百姓た地頭ふ荷擔ふ。頼もしき所ふり。我国た遠国偏土ふ。ふ我ゞ地頭ふ荷擔ふ。頼もしき事のゝ有アと人ゝ思ふる故ふ。礼貞て。外ふ向ひ恥ゝしき事のゝ有アと人ゝ思ふる故ふ。礼貞れ風俗ふる也。と見えさるゞ。君と交ひてふむ宗ふ其言の違たざはを知さはは。斯て己ゞ生国の若狭人の事ふ。當国た人氣相和ふる事ふく。意ゞれ躰ふり。昨日た睦ゝアはる中

め今日は疎おゆて其非を舉る風あゆ下とて上を欺き
己が科を正さまゆれ却て人の不法れ如くふ云あせり取
はむし利発あるる故り差當れ辨舌一花れ氣勢む有まども
根の遂る所あしと有るも己の国人れ本性をよく見さ法も
説ありとて其所くを披まて見せさるぞ己が此書を見し法
始うハ有々法然てかく此人よ益を得ぢ〳〵十五年ホど交
らひ々は文政二年よかの古史成文同く徴あどを抜ふ彫
るとき信友云々らく己れオ短くはさ仕事ちがく暇あま
ゲ上ふ身の病さ子憂發ゆ勝あまバ息の内よ功成さむ事
覚束あし汝れ心さ子速き生まのらよて思ひ立さる事ハ必
遂べき益荒男あゆ己が挂ても及ぶべき限ふ非ず今よゆを
れ己ゲ負氣あき書撰の心を弃て大人の功事れ成る下書多待
てむ今日まで集ゆさるべし取ゆき書どめ〳〵片成ふる考説の
も皆ぞら譲るべし取ゆき書取り捨べきれ捨給へと物
書も咬ゲしる云よ諾と云て彼人の名をも世ふ知ちめむよ
と彼開題記よ其説を云あまさ書載さゆゆ我ゲ学びの兄弟
め佗ふも学びよ外あるもふて行ひめ何くれゆ心著て有
る人よ有はじき事とれるあ法学び兄弟ゆ心著て有
も有れむかの国ぞらの本性あど出むふれ大事あり何ふ例
しる人れむ国ぞらの本性あど出むふれ大事あり何ふ例
ゆ有れど云ひ難ゆ事れるよ況て善を責て友を失ゆる例
ゆ有れど云ひ難ゆ事れるよ況て善を責て友を失ゆる例

せまし悲くて此時しも かの是人れ人ゆゆゆゆゆと能く
見れむてふ哥れ吟き出られゆゆゆ然れど外ゆ道の為よ思
ひ直して時こそ有らめと穂よも出さゆ幽よれ愧る事ゆ
ゲら怨を匿して友とせし事まさ十年餘ゆるゲ猶しも然
る事ども有るよ己ゲ国ぞらの本性の忍びの祢て文政十
二年の夏頃ゆゲ家ふて密よかれ事ども五六條取並べて
切ふ諫めて宋の族よゆゆも親ちく思ふ君ゲかゝる聞えあ
ゆゆて己ゲ面伏とも外りて自然よ道行く人と外し然ら
ゆゆ事も有べしゆぞわざゆを思れぬ事をも云て諫めゆふ
二三日れよて消息のぬミ遣せゆゆるゆを見れむ聖賢の定て
し如く心れ底ひも万ゆれぬ法ひも え守ゆあ子難さり
神等ふゆら然れみれれ法ひも え守ゆあ子難さり
ゆざも有ゆむゆど私心よ神習ふとして引よせ掟さる事
ゆのりて在経ぬるを然るゆぢれよふ侍れむ己ゲ身の為
ふれ陋しき心のちし出て偽ゆおゆし人をさばの中欺き
事外どの上ふも下よも更ふ何ら安清く法くれミとれ争
で ゝ申さゆき侍るゆき然れむおさび誠め聞え給ひさりし
事等もよく思へば例れ心習ひふて盡く過ち多ゆゆゆと
は有れど次よ其條く大ゝさ己ゲ不法のおと云る趣ふい
ひ釈きて今行さ外れ行ひも謹むとれゆきぞ例れ本性の

ちし出はじきよも非ざるを然らむかた君の面伏かまむ。
相見ぬ昔の道行く人ふ見ふし給たむとれらむ力れし。と
書さゆ情淺くも云る言ゃ外とは思へぞ彼家よもれたて。
己ゞ云る言れ中よた意得ゑゞひし事も有ふむ今し道行
く人とふらむふは互ふ佗ふ笑はるゑし外ど種ゝふ言ひ行
あしら牙て其道た絶ざ已しゃど穴悲ち是よ已後た自然
ふ炫まの出來て己はも其睦びを昔ふ背牙じと思へど己
一尺安〳〵めむ彼た二尺退き已れ三尺進めむ彼た六尺退
よ於〳〵近き十年ゃどは吾いゃふ訪へども彼ハ來らば。か
の諫め於る頃ゑゆ讓らむとて吾よ屬さ已し物等をも次
次よ取已ふ遣せて殘ふく返さしめ剩よ世ふ得ゞさか已
し新撰字鏡の詳本字類抄淨藏法師傳ふどを始め西よ走
已東ふた志ゆ苦心して取出さる書どもはゞ彼よ写させし書も。い と多
置さるゞ多く其外よも己ゞ本めて写さ已し書も今度の舉ふ於
の体を後よれゞ本を無外れし為体も有まバ入ま置され
きて借てよと云やるふ今は込体於佗の庫ふ入てた斯むゃ
ば出し難しふぞ断を立て借さ爰物学ぶ上りて斯むゃ
已悲き事た石らじはさ佗と我ゞ事ふ及ぶごを傷学のゃ
よし城顯露ふらじ爰云ひ聞しめ於人よ贈れる消息ゞ世
ふ種くのあと外し言の惡事をさへふ書載せふゞ世よど傳

弘ま已て我ゞ道の妨害とふれる事ども甚多ゃゆ西土
人の言ふ交絶猶無惡言をいひ我まさ人たをし人と非ら
ばも我やひと人とる道を行ゃて有ゆめ忘と言擧もち於
きむ彼たをし犬芦を揚ぐとも吾その犬芦を眞似ぶべき
ふ非爰とた思牙ど然ふ消息れ写しふど弘まゆたさ彼ゞ
書調牙し物等を見るよ已ゞ説れ裡を搔さる説多れまむ
其を辨ふるとして止事を得爰かく冷む然たあれど笠間
ゆ坐安比賣神のいゃふ旁いさく見行れらむを最も嘆
息しく悲しゃきど彼も我も其 或人まさ問ふ此人素よ已
囮柄の氣質ふふを何をせむ。
其著書ふ佗説を善くめ惡くも誰ゞ説と云ふ事ち好はぬ
性ふゆとた何ふふ事ぞ答ふ彼人常れ立説ふ今世の學者
多く此は某ゞ考そは誰ゞ説とて其説の先後ふどを論ふ
は劣れを議ふ已然るた其説そし先後石已とも我人共ふ
見ふ所の古書ふ據れる考説ふれむ拘はるふ足爰を云き。

故是人の著述といふ物已ゞ見し限ゞを都て云はゞ佗人
れ創意せる説を取りてかの校合増補を用ひて敷延しお
お創意れ人の名を覆ひて其を竟ゐ我ゞ有とおせる説等
多かり是はと己と氣質れ合ざ法所おゞ然れど中善かゞ
し程も常ゐ快らぬ事どめ有々ゞ濡てむ己ゐ露も厭ふ
一ッ二ッを云むは伊勢物語もと業平朝臣の思ふ旨あゞ
て自記せられし哥集よて在五中將物語と云ひし物ゐる
を後人の佗事をも取交へてかく名けし物ゐて古今集ゐ
此朝臣れ歌の入さる詞書も其自記を取舍し多載せる物
といふ事も己おゐ髭も生ざゞし程もりの説よて伊勢物
語梓弓といふ物よ記して其中よきおよは免ゐずてふ歌
の説おぎも誰ゐも語ゞ古戎屋代翁れ参考本ゐゞゞ名を
云おとを遺きて出せるを信友見ゐ祢て屋代翁ゐ云
ひやりし事も有りき然るよ其後彦根の海量法師ゞの家
ゐ居々はゐど其説多聞くゐ業平朝臣れ自記と云ことも

彼も同説ふしてゐつ先輩おきむ梓弓の稿も乗さりし
ど彼開題記よその端倪を著せるゐ信友元をり業平朝臣
の自記てふ説も受ざゞしゐば其を見て刪ゞ斉よとまで
云さゞき其後まさ事の因よ王祥よも記せしゐば彼此よ
ゞ難免遺せさる人くも有々ゞ然るゐ先ごろ彼人の伊勢
ゞ家集を論へは物を見さるよ既ゐ自説と化むし心巧よて
有々る戎異しと見けるゐ假字の本末よも全く自説と成
去はして此物語も業平朝臣思ふ所あゞてゐざと有し事
もゐらはし事も心のおもむくはゞよ自書去はし今れの
涯の哥をさゞゐ作ゞて書載給へる書おるを後ゐ佗人れ
書加ゞさる文れいちゐ交きる物れはべく推はゐり思
はゐゞ已ゞ考ゐゞと著せりおも前ゐ刪きと云ひし事を
恰きて其後よ自得せるゐ闇合せるゐも有ゞ々きど此人
の書さる物どめ大ゐさ其趣おれば如何あらむ縦咲哉し
此等れ小考をも幾百ち佗の有と化るとも我ゞ大考と思
ふ限りも取こと能ゞ其も天朝無窮暦赤縣太古傳印度
藏志おど戎去そ取せ免と誘ひおるよ頭ふりて見ぬを強
ひて見去れむ血を吐く思ひおり我りも其義知られ去と
逃きむ外りはさ今よ悲しく思ふも堤朝風おり篤實潔白
さぐひ無き人ゐて信友よゞも舊き学びの兄れるゞ若の

りし程より、鈴屋翁の年譜をかき記さむと志して、享和三年の事にりき。春庭主と大平主とに其志をいひやり、切にこひて、故大人の自記なる本居系図と家の昔物語とを借よせたる、去ま此二書の世に出たる初にてぞを篤胤が寫して、其由を奥書にしるし、其後信友に朝風がしか語りてはた写させたりき。斯て朝風故大人の事のら種々に紀し明して、遂に其年譜の成たるを、物なくて板に彫こと能はず歎き居れるに、文政六年の事とれおも我が家にて堤と伴と始めて遇たる時に、己かたり出て、彼年譜を伴にかし見せる事をもありき。然るに信友それ年譜にいさゝか筆を加へるもして例の己が有と為さゆ。抑人の傳また年譜にども書去空紙数も少かるも大きに心用ひある事にて案そ容易からぬ事あるを最め情あま事あら炙や朝風か於て人を怨むる言れどは云ざりし人のきどせ炙て書の石しよ我が名を一言ざは云ひて有るし物をと今はよも云へりし言の今も耳に留まれり。そはりが取もちて借たる譜によて有きばあり繼ひ自身も同じ意に元ゝり記し置たるが有しよも何き右の手於くき有きむ朝風が志をも顕安ゐき事れらばや神の御世よゆ人の名を顕はし知しむるをこそ人の太じ圯徳とも為さりくき

伊吹迺屋先生及門人著述刻成之書目　塾藏版

- ○古史成文　神代部　三卷
- ○古史徵　神代部六冊　開題記五冊　十一卷
- ○古史傳　自初卷至廿四卷　六袟刻成
- ○古史本辭經　五十音義訣　四卷
- ○神代系圖　折本箱入　一帖
- ○同　小折本　一帖
- ○同　掛軸料　一枚
- ○靈能眞柱　二卷
- ○神拜詞記　一帖
- ○玉多須喜　二帙　十卷
- ○太元圖說　石摺　一幅
- ○古道學神号　同　一幅
- ○万聲大祓譜　一幅
- ○弘仁歴運記考　二卷
- ○神字日文傳　二卷
- ○疑字篇　日文傳附録　一卷
- ○皇國度制考　二卷
- ○祝詞正訓　二卷
- ○大祓詞正訓　折本　一帖
- ○天津祝詞考　一卷
- ○古道大意　講本　二卷
- ○静乃石屋　同　二卷
- ○皇典文彙　三卷
- ○童蒙入學門　一卷
- ○入學問答　附著述書目　一卷
- ○牛頭天王暦神辨　一卷
- ○醫宗仲景考　一卷
- ○古今妖魅考　三卷

○鬼神新論　一卷
○悟道辨 同　二卷
○大道或問　一卷
○立言文 同　一幅
○赤縣歷代尺圖　一枚
○[redacted]
○宮比神御傳記　一卷
○神字彙　一卷
○神德畧述頌　一卷
○喪儀略　一卷
○[redacted]
○[redacted]
○[redacted]

○春秋命歷序考　二卷
○伊吹於呂志 同　二卷
○木匝祖神号 石揩　一幅
○武道祖神号 同　一幅
○荷田翁啓文　一卷
○[redacted]
○天滿宮御傳記略　二卷
○古學二千文 同 側　一卷
○古道訓蒙頌　一卷
○葬事略記　一卷
○[redacted]
○[redacted]
○[redacted]

○出定笑語 講本 附錄　三卷
○俗神道辨 同　四卷
○德行式 同　一幅
○醫祖神号 同　一幅
○[redacted]
○日女島考　一卷
○草木撰種錄　一枚
○叶古要略　一卷
○石揩類　數種
○[redacted]
○[redacted]
○[redacted]